
夏の遊戯

あお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の遊戯

【Nコード】

N7047W

【作者名】

あお

【あらすじ】

沢田武はどこにでもいる至極普通の中学2年生だった。ある日彼は友人の桂木奈緒に誘われ、幼いころに二人で訪れた山中のコンクリート小屋へ忍び込む計画を画策する…。

エピソード

私の親愛なる友人、沢田武様へ

あなたがこの手紙を読んでいる時、私、桂木奈緒という人間がこの世に存在しているか

どうかはわかりませんが、それでもどうか私の話をお聞きください。昨日の晩、あなたと二人で忍び込んだコンクリート小屋の地下で私が目にしたのは、言

葉では形容できないようなとても奇怪で恐ろしいものでした。あなたの小屋の外で待つと

いう判断は正解でした。なぜなら、あれを目撃してしまつてはその後に正気を保つていら

れる保障がないからです。ご多分に漏れず、あの晩あれを目撃してしまつた私も、直後か

ら相当な苦悩を強いられることになりました。おそらく私の態度がいつもと違う様は、あ

なたからも容易に見て取れたかと思います。

突然ですが、あれを目撃してしまつた私は、苦悩の末にある結論へと辿りつきました。

そして今夜、私の導き出した結論が正しいのかどうか確かめるべく、再びあのコンクリー

ト小屋に赴くつもりです。その場所で私はあることを実行したいと考えています。

仮に私の推論が的中するようなことがあれば、それを行動に移した瞬間に私という存在

は、この世から文字通り跡形もなく消えて無くなってしまうことでしょう。皮肉にも、自

分自身の消失によって私の推論が正しかったことが証明されるのです。そうなれば、この手紙が私の残した最後の遺物となるでしょう。いえ、そもそもこの手紙自体が後に存在しているかも実際には疑わしいところです。

恐らくあなたは、私が伝えたい事実を汲み取れずに手紙の前で首を傾げていることでし

よう。それでいいのです。どうかこの手紙のことは忘れてください。あの夜の出来事は全

て忘れてしまったほうがあなたの為でもあるのです。しかしできることならば、私、桂木

奈緒という人物が確かに存在していたことだけは、どうか覚えていてほしい。私は今日で

消えてしまうかもしれませんが、でも私には、あなたと語りたい事、訪れてみたい所など、

山ほども残っているのです。だからこそ私は、もう一度あの場所へ訪れ、私の考えなど杞

憂に過ぎないことを自ら確かめる必要があるのです。

最後になりますが、明日、いつも通り学校で、あなたに会えることを願っています。

桂木奈緒

沢田武は少し早めの朝食を済ませると、学校へ向う為に家を出た。始業の時刻までは余

裕があつたので、通いなれた通学路に新鮮味を見つけ出すように、周囲の景色を眺めなが

ら時間をかけて歩いた。とはいえ、見渡せば田んぼや林や民家やらの景色に、新鮮味を見つけ出すのはこの上なく難儀なことだった。武は大きな溜め息をついた。

武の住む『小袖村』（こそでむら）という村は、東北地方に存在する人口約二千程の小さな村で、更に村はいくつかの小さな地区に分けられていた。武の住まう『久間』（ひさま）という地区だけに限定すれば、人口五百人程しかない。田舎も田舎といった所だ。

久間は海に面した沿岸沿いにあり、周囲を小高い山が包囲していた。自然に囲まれているといえは聞こえはいいが、二十一世紀の日本においてすべてが自給自足の生活というわけにもいかず、食品や生活用品の買い出しなどの度に車で街まで出て行かなくてはいいけないので、生活する上で不便な点も多かった。

久間には小学校と中学校が一枚ずつ存在し、地区の子供たちは特別な事情が無い限りこれら学校へ通うことになる。一枚ずつしかないのだから、顔を合わせる面子は必然的に小中学校通して同じとなる。これから武の向おうとしている中学校も、その村に一枚だけの

中学校だった。各学年に一つのクラスしか存在しない小さな学校だ。今年中学二年の武は、つい半月ほど前に一学期の期末テストを終え、もう一週間ほどで訪れる夏季連休をまだかまだかと待ちわびていた。

武が教室の扉を開けると、そこには夏季連休目前の独特の雰囲気

に満たされた、一種異様な室内があつた。小学校入学当時から変わらぬ面子に片手を挙げ、少々投げやりな挨拶

をする。同じく投げやりな返事を背に受け、武は自分の席に着いた。武の席は窓際の後ろから二番目の席だった。鞆を机の横に掛けると、次いで左手にある

窓を開放する。それと同時に、顔をしかめなくなる熱気と、かしましい蝉の声が入り込ん

できた。まだ朝九時前だというのに既に相当の量の汗をかいていた。夏は嫌いではない武

だったが、さすがに連日続く最近の猛暑にはうんざりしていた。

武が何とはなしに窓の外を眺めていると、武に挨拶を掛ける者がいた。武が振り向くと、

そこには『桂木 奈緒』（かつらぎなお）というクラスメイトが鞆を掲げて立っていた。

「おはよ。いやー朝から暑いねー。ほんと、まいっちゃうわ」

奈緒は愚痴をこぼすと、自分の席である武の後ろの席へと腰を下ろした。

「そうだな。また夏が始まったって感じ」

武は窓の外に視線を戻しながら呟いた――。

武と奈緒は小学校入学当時から特別仲が良い。それには、奈緒の男女隔てのない性格が深く関係しているといっている。

奈緒には小学校時代から少々男勝りなところがある。それは周りの女子がゴム跳びやあやとりをしている中、一人男子に混じって野球やサッカーに興じるという具合だった。

性別上は勿論女なのだが、ショートにした髪型と男性的な服装と性格から、男子と遊んでいても特に違和感は無かった。なので男子の方からも爪弾きにされるようなことは無く、すんなりと受け入れられていた。それなら同性との関係は、と思ってしまうが、こちらも仲間はずれにされるなどといったことはなく、その飾らない人柄から同性からも好かれていた。つまり誰とでも仲良くなれる人物だったのだ。さすがに小学校高学年辺りからは男子と遊ぶことは少なくなったが、中学生になった今でも、相手がたとえ異性でも気兼ねなく接するというスタイルは変わらなかった。

武と奈緒は家が近所ということもあり、二人で一緒に遊ぶということが多いあった。遊びの多くは自然的なものが多く、夏は川遊び、海水浴、虫取り、近所の山の探検。冬はソリ遊び、かまくら造り、雪合戦、などといった具合だ。

夏休み等は朝早く奈緒に連れ出されて家を出て、夕方遅くに帰宅というのが常だった。それは今思えばかなりハードな日常だったが、それでも武は毎日が楽しいと思っていた。

しかし先に述べた通りそういう自然的な遊びは成長するにつれて減ってゆき、最終的には

週に二三度、お互いの部屋に集まって話すという形に落ち着いた。

武の今までの人生を通して言えば、男友達と遊んでいる時間より奈緒と遊んでいる時間

の方が圧倒的に多かった。それは単純に、他の誰と遊ぶより奈緒と遊んでいる方が楽しかったからだった。

普通、二人の男女がほぼ毎日のように一緒に遊んでいれば、二人は恋人同士なのでは？などと噂されるものなのだが、武と奈緒に限ってはそういうことは不思議となかった。

恐らくそれは、前述したような奈緒の同性とも異性とも分け隔てなく接する性格に由来するのだろう。武にしても、小学校卒業までは奈緒のことを異性の友達というよりは同性の友達に近い感覚で捉えていた。いや、恐らくクラスの男子の大多数は武と同じ風に思っていたことだろう。

しかし中学校入学を境に、武の奈緒に対する気持ちに変化が生じ始めた。奈緒は中学生になり、それまで短く揃えていた髪を伸ばし始めた。同時に、小学生時代は自由だった服装が制服へと変わり、セーラー服を纏うようになった。その二つの出来事が、武に少なからず気持ちの変化をもたらしたのだ。その時から武は、今まではほぼ無いに等しかった奈緒を異性の友達として考える気持ちを抱き始めた。それは少し気恥ずかしくもあり、少し寂しくもあった。

—— 6 時限目の終了を告げる予鈴が教室内に響き渡る。長かった一日が終了し、武のクラスは放課の時間を迎えた。

「んじゃ、帰ろっか」

「うむ。あー疲れた……」

武と奈緒はいつもの様に二人揃って教室を出た。家が近所である二人は、小学校時代から二人で下校することが多かった。お互いに友人との予定がない場合は、自然とこういった流れになる。

夕方になっても外は相変わらず暑かった。それでも日中の容赦ない日差しに比べれば、

それが弱まった分いくらかましに思えた。

生徒玄関から出てきた生徒は、皆口々に暑さに対する泣き言を漏らす。武と奈緒もそれらの生徒に混じり、二人ならんで校門を出た。

自宅への道のりを歩いていると、奈緒が口を開いた。

「ねえ武、あれ覚えてる？ 小学生のころ、瀬山さん家の裏の林を探検したときのこと。」

そこで、コンクリートでできた小屋を見つけたよね」

突然に昔の事について訊かれたので、武はそれを思い出すのに数十秒を要した。

「ああー、懐かしいな。中に入ろうとしたけど、扉に鍵が掛かって入れなかったやつか」

武と奈緒は小学生時代、探検と称して近所の山へ出かけることが

何度かあった。コンク

リート小屋とは、その時に偶然発見したものだった。

「そうそう。周りもフェンスで囲まれてたし。なんだったんだろうね、あれ」

「さあなー。何かの施設だとは思っただけど。でも林の奥にあんな嚴重な施設なんて必要なのかな」

「どうだろうね。そもそもあの小屋の存在自体、知ってる人少なそう。親に聞いても知らなかったし。でも使われてるのは確かだと思う。あの時私たち、中へ入っていく人見たよね？」

「ああ、俺たちが一生懸命、フェンスの下に穴掘ってた時か。咄嗟に隠れたから見つからなかったけど、あん時は本当焦ったな。確か作業服みたいな着た人が、鍵開けて中へ入って行ったな。顔は見えなかったけど。一時間くらいして外に出てきたと思う」

「ということは今でも使われている小屋であることは間違いないわけだ。それなのに、私の知り合いや親は誰一人としてあの小屋の事を知らない。ねえ武、なんか気にならない？」

「気になるって、何が？　というか、何たっていきなりそんな昔の事を思い出したんだ？」

考えてみれば、奈緒が昔話をするのはめずらしいことだった。それほどに気になる事が

あるのだろうか。それから少し間があってから、奈緒は切り出した。「武、もう入りたい高校とか決めてる？」

「え？」

意表をつき、奈緒が口にしたのは先ほどの会話の内容とはまったく関係のない話題だった。

たので、武は面食らってしまった。

「また唐突だな。まだ決めてないけど、それがどうしたんだ？」

さっきの話と関係ある

のか？」

「私達、来年はもう三年生だよ。つまり受験生。そうになったら、受験勉強やら何やらで、

きっと忙しくなるよ。そうなる前に、私武ともっと遊んでおきたいと思ったの。昔みたい

に。そんな時コンクリート小屋の事思い出して、また二人であんな風にわくわくするよう

なことしたいなあなんて……」

武は話を聞き、奈緒が何故急に昔話を始めたのかを理解した。奈緒は中学三年生という

多忙な時期を迎える前に、今しかできぬであろう中学時代の思い出を、武と共に作ってお

きたいと考えたのだ。

それを知ると同時に、武は感心していた。

奈緒は既に受験生という先のことまで考えている。それが武の知る奈緒の考え方よりも

少し大人びて感じられた。中学二年生の武には、高校受験の話などまだ先のことと思われ

ていた。しかし言われてみれば、確かに受験という事実はもう間近に迫っているのだと思

い知らされる。

「なるほどな。それで前、またあのコンクリート小屋に行ってみたいと思ったのか？」

「うん。実を言うと、コンクリート小屋が気になるっていうのはただのこじつけ。本当は場所なんてどこでもよかったんだ。また昔みたいに武と一緒に遊べるなら。……ねえ、駄目かな？」

恐らくそれは、小学生時代の大半と一緒に過ごした武にしか協力できぬことだ。奈緒もそうだった武との昔の記憶を回顧するうちに、今回の思い出作りを提案するに至ったのだろ。

武は奈緒のその思いを知り、思い出作りにできる限り協力しようと思った。また武自身にも、奈緒と中学時代の思い出を作っておきたいという気持ちがあった。

「おいおい、あの頃のお前なら、俺に有無を言わず家から引っぱり出してたじゃねえか。もちろんいいに決まってる」

「ほんと？　ありがとう！　武ならそう言ってくれると思ってたよ。そうと決まれば、

小屋の中へ忍び込む方法とかいろいろ考えないと」

「え、小屋の中に忍び込むのか？」

「あたりまえじゃん。子供の頃はできなかったけど、今度はちゃんと中まで入って、あ

の小屋の正体を明かそう。ということで、早速今日武の家についてもいい？」

「今日かよ。今日はもう遅くないか」

「思い立ったらすぐに実行したいの。武、私の性格知ってるでしょ」

「……わかったよ。じゃあ家帰ったら俺ん家集合な」

「うん、わかった。なんかわくわくするな！」

実のところ、武も多少ながら胸を躍らせていた。中学入学以来そういった事とは久しかつたので、また奈緒と二人で子供の頃のように遊びに興じられるということは、とても嬉しいことだった。たとえコンクリート小屋がただの打ち捨てられた廃墟だったとしても、そこに至る過程で満足できればそれでよいとさえ思った。忘れていた、二人で野山を駆け回った少年時代の記憶が次々とよみがえる。帰路、二人の昔話は家に着くまで尽きることなく続いた――。

「お邪魔しまーす」

帰宅後、二階の自室で待機していた武の元へ、聞きなれたはつらつとした声が届いた。

階段を登る足音の後、武の部屋の扉が軽く叩かれる。

「奈緒か。入っていいぞ」

「お待たせ。どんな感じですか？」

「まだ何もやってねーよ。じゃあ早速作戦会議だ。適当に座ってくれ」

部屋の中央に置かれているテーブルの前に奈緒が着座すると、武がそのテーブルの上に真新しいA5サイズのノートを一冊広げた。

「お、ノートにまとめるとか本格的だねえ。それじゃあまずこの作戦の作戦名から考えないと」

「作戦名か……。じゃあ、『コンクリート小屋 潜入作戦』とかは？」

「えー普通すぎるでしょ」

「じゃあどんな名前がいいんだよ」

「えつとね……外国っぽく、『Operation Concrete house』なんてどう？」

「英語にしたらじゃん……。まあそれに決定して、次に進もう。とりあえず、どうや

つてあの小屋に忍び込むかな。奈緒はなにかいい案ある？」

「そうだねー、周りを囲ってるフェンスは、前みたいに穴を掘れば潜り込めるでしょ。」

問題は、小屋の扉の鍵をどうするかだね」

過去に一度コンクリート小屋に訪れた際、二人はフェンスと地面

との間に穴を掘り、その穴をくぐって中へ侵入した。初めはフェンスをよじ登って越えようと考えたが、フェンス上部が有刺鉄線になっており、やむなく前述の手段へと変更したのだ。

「俺、ピッキングなんてできねーしな。かといって、鍵をぶっ壊すってのもまずいよな

あ……」

——しばしの黙考の後、奈緒が口を開いた。

「ねえ、こうしても時間が過ぎて碎けなんだからさ、今から二人でコンクリート小屋行ってみない？ 下見も兼ねてさ。まだ明るいから、直ぐ行って戻ってくれば大丈夫だよ」

それは確かに良い提案だった。百聞は一見にしかずといったところだろう。少し考えてから武は答えた。

「そうだな。実際に見たほうが、いい考えが浮かぶかもしれないし。そうと決まれば、早速行ってみよう」

かくして、二人の意見はこれからコンクリート小屋へ向うことにまとまった。下見だけということ、二人は特に荷物などは持たずに家を出た。

例のコンクリート小屋は、近所に広がる林の少し奥まったところに存在していた。まず武宅から5分ほどの距離にある一軒の民家を目指す。民家の裏手には林への入り口がある

ので、そこから林へと進入する。そして林に入って獣道を10分程歩けば、目的地である

コンクリート小屋が見えてくるはずだった。

二人は幼少期の記憶を頼りに目的地を目指した。初めは迷うことなく辿り付けるか心配

だった二人だが、山に入って10分、無事にコンクリート小屋を発見することができた。

「あ、あつたよ武！ あそこ」

「はあ……はあ……。やっと着いた……。俺たち、昔もこんなに歩いたっけ？」

「武、運動不足じゃない？ やっぱ部活入りなよ。……そんなことより小屋だった。ほら、行くよ」

コンクリート小屋は前回訪れた時同様、周囲をフェンスで囲われていた。フェンスは高さ3メートル程で、上部には有刺鉄線が張り巡らされていた。

「昔のままだね。私達が昔掘った穴はどうなってるだろう？」

二人は、前にフェンス内へ侵入する際に掘った穴を確認するため、小屋の裏側へと回った。

「あちゃー穴なくなってるよー。絶対にこの辺だったはずなのに……仕方ない。面倒だけど、また掘るしかないね」

誰かが埋めなおしたのか、あるいは雨風により自然に埋もれてしまったのか、過去に掘

った穴は跡形もなく消えていた。穴はもう一度掘りなおすことに決め、二人は次に小屋の

への進入方法を考えることにした。

「フェンス越しだからわからないけど、やっぱり鍵掛かってるんだろうな」

「だろうね。前の時も掛かってたし。うーん、何かいい方法ないかな」

二人は互いに、小屋への進入方法を思いつくままに提案してみた。しかしどちらの思い

つく方法も何かしらの不備が有り、実践するには至らないものだった。考えが行き詰まり、

二人は辺りをうろつき始める。すると、小屋の周りをぐるぐると巡っていた武が叫んだ。

「おい奈緒。あれ、窓じゃないか？」

奈緒は武が指し示す方を見遣った。すると、コンクリート小屋側面の上部に、幅60セ

ンチ、高さ30センチ程の窓のようなものが見て取れた。

「ほんとだ、換気用かな。でもうまくすれば、あそこからは入れるかも」

「でも結構高い位置にあるぞ。それにあの窓、外側からじゃ鍵掛かってて開けられないと思う」

「大丈夫。クレセント錠なら、窓に小さな穴を開けるだけで開錠できるよ。問題はあの高さだなあ」

「……お前そんなこと良く知ってるな。でもあの高さだと、踏み台が何かを使わないと届かないぞ。しかもフェンスがあるから、あそこまで踏み台を持ち込むの難しいと思う。どうすんだ？」

奈緒は目をつぶり、しばらくの間黙考した。そして何事かを閃いたのか、唐突に声を上げた。

「そっか！ 武が踏み台になればいいんだよ。なんでこんな簡単なことに気付かなかっ

たんだろう」

「おいおいまじかよ……。でもそれじゃあお前しか中に入れないし、戻る時同じ方法は使えないぞ」

「武は外で待機してくれてればいいよ。帰りはそうだな……………縄梯子。縄梯子を使えばいい。縄梯子なら、フェンスに掘った穴でも通せるでしょ」

「縄梯子ねえ。まあできなくはないか……。でも一人で入って大丈夫か？」

「平気平気。いざとなったら大声出すし。もし私の叫び声が聞こえたら、武が助けを呼んでね。それじゃあ中へ入る流れをまとめるよ。まずフェンスの下に人の通れる大きさの穴を掘る。穴を掘り終えたらそこから中に入り、窓に穴を開けて鍵を開錠する。そこで武が踏み台になって、私が小屋の中に侵入する。それで戻るときは縄梯子を使って戻る。よし、完璧」

「ふむ、とりあえずほかに良案が出ない限りは、それでいくことにしよう。方法も決まったことだし、暗くなる前に帰ろうぜ」

「そだね。細かいことは明日学校で話そう」

気付けば既に、辺りには夕闇が迫っていた。しんと静まり返った森に、不気味に鳥の鳴き声が響き渡る。二人は目でお互いを確認すると、帰路を急ぐようにして歩き出した――。

翌日、昼食を終え昼休みへと突入した二人は、昨日に練られた計画の概要を細かくまと

まる為、教室にて話し合い開いた。

「私、今朝家に縄梯子がないか探してみたんだけど、見つからなかったんだ。やっぱり

普通の家には置いてない物なのかな。そういうことで、縄梯子を自作することにしました」

「自作か。まあ簡易的なやつなら、作れなくもなさそうだけど。それと、窓の鍵の件だ

けど、具体的にはどうやって開けるんだ？　なんか小さな穴あけるとか言ってたけど」

「ドライバーをサッシ枠とガラスの間に差し込んで、てこの原理でぐいとね。そうす

ればガラスが割れて小さな穴ができる。そこから手を突っ込んで鍵を開けるの」

奈緒は手真似を交えながら、鍵の開け方について説明した。

「なんか空き巣みたいだな。まあやってる事は同じか。じゃあこれをいつ実行するかだ

な。なるべく人目につかない時間帯の方がいいだろう。そうすると、夜か？」

「うん。日中だと、この前みたく人と遭遇する可能性もあるからね。あとは日時だけど

……」

「明日がいいんじゃないか？　丁度学校休みだし。日中は縄梯子作ったり、必要なものを用意しよう」

「オツケー。それと、このことは絶対に誰にも言わないこと。二人だけの秘密。わかった？」

「言われなくても分かってるよ。じゃあ明日の朝、お前の家に行くよ。」

こうして二人の計画は大方まとまりを見せた。計画に必要なもの等は、実行日当日である明日の日中に用意することになった。

——翌日、この日学校は休みということで、武は朝から奈緒宅に訪れた。インターフォンを鳴らすと、玄関から奈緒の母親が顔を出した。

「あら、たけちゃん、おはよう」

「おはようございます。奈緒はいますか？」

「奈緒なら車庫の方にいるわよ。お父さんに縄だのスコップだのがあるか聞いてたけど、何に使うのかしら」

「さあ。また変な遊びでも考えてるんじゃないですかね。……それじゃあ車庫の方行ってみます。ありがとうございます」

計画が奈緒の母親に露呈してしまわぬ様、武は何も知らない風を装った。彼女の様子からして、何かを勘繰っているわけではなさそうだ。武は奈緒の母親に礼を言い、奈緒が居ると言う車庫へ向った。

車庫では奈緒が縄を片手に何やら試行錯誤を繰り返していた。奈緒は武の接近に気付かぬほど、目下の作業に集中していた。手を動かしては、しきりに頭

をかしげている。武は

気付かれぬよう奈緒の背面に回り込むと、脅かすようにして声を掛けた。

「よっ！ 朝からせいが出ますなー」

奈緒は驚いて体を仰け反らせた。そして振り返り声の主を認めると、途端に膨れっ面を作って見せた。

「もう！ 本当にびっくりしたじゃん！ 今度やったら絶交だから！」

「そんな怒るなつて。ちょっとからかっただけじゃん。それで、縄梯子作ってたのか？」

「そうだよ。せつかくいい調子だったのに、武のせいで調子狂った」

「そうは見えなかったけどな……」

「え？」

「ごめん、一緒に作ろう。俺も手伝うからさ」

「……わかった」

武が縄梯子製作に協力するという事で、二人は和解した。勿論説明書など有るはずも

無く、頭の中にあるイメージだけを頼りに製作した。悪戦苦闘すること一時間、ついに二

人は縄梯子を完成させるに至った。しかしその出来栄は、辛うじて縄梯子の体裁を保て

ているといった具合だった。

「よし、完成だ！ まあ見た目は悪いけど、ちゃんと使えれば問題ないだろ」

「じゃあその庭木に引っ掛けて、ちゃんと重さに耐えられるか確認しようよ」

「そうだな。それでもし駄目だったら。お前夜までにダイエット

しなきゃな」

「なにそれ。私が太ってるっての？」

「冗談冗談。そんなことより、早く試してみよう」

二人は完成した縄梯子を早速試してみることにした。近くにあった庭木の枝に、縄梯子

の一方の先端を結びつける。そしてしっかりと固定されていることを確認し、奈緒は一步

一步確かめるように縄梯子を上っていった。やがて枝の上まで到着し、縄梯子の耐久度が

問題ないことが証明された。

「やつほー。すごい、ちゃんと登れたね。これなら本番でも大丈夫だ」

「ほんと器用な奴だな、お前は。……あ」

「え、どうしたの？」

「いや、なんでもない。それより早く降りてこいよ」

「何だよ。ノリ悪いな」

実はこの時、季節が夏ということもあって、奈緒はスカートをはいていた。そういう訳

で、真下から見上げていた武には、スカートの中が丸見えだった。

それに気付いた武は途

端に羞恥を感じ、奈緒に下へ降りることを促したのだ。

「……よつと。ただいま。あれ、どうしたの武？ 顔赤いけど、熱でもあるんじゃない？」

「いや、別に……。そんなことより、今日必要になりそうなもの、今の内に用意しとこ

う。ほら、必要そうなものリストを、ノートにまとめてきた。」

「お、やるねー。じゃあリストにあるものを用意してみよう」

二人は必要になると思われる物を用意していった。その殆どが、親に使用用途を聞かれ

ては困る物だったので、見つからぬようにこっそりと持ち出した。

「えっと、縄梯子、懐中電灯、シャベル、軍手、ドライバー……よし、これで全部だね。」

あとは、何時に作戦を決行するか」

「家族にばれたらまずいから、夜更けの方がいいな。そうしたら、十二時ぐらいか？」

「了解。じゃあ十二時にしよう。集合場所は私の家で。汚れても大丈夫な服着てくること。」

と。間違っても、寝過ごしたりしたら駄目だよ」

「大丈夫だって。お前こそ、怖くなって逃げ出すんじゃないぞ。じゃあ俺、一旦家戻る。」

くれぐれも忘れるなよ」

「うん。それじゃあまた夜中に」

二人は夜中十二時に集合する約束を取り交わし、一旦解散した。

深夜十二時。武は家の者が寝静まっているのを確認すると、物音を気取られぬよう、そ

っと家を抜け出した。懐中電灯を灯し、奈緒宅を目指す。

武が奈緒宅に到着すると、奈緒は既に家から脱け出して来ていた。

「早かったね武。それじゃあれ持って」

奈緒から武にシャベルが一本渡される。奈緒の背中には、これから使用する道具が詰ま

っていると思われるリュックサックが担がれていた。

「忘れ物は無いか？」

「大丈夫。……それじゃあいこうか」

二人はコンクリート小屋へ向けて歩き出した。さすがに田舎のこの時間では、明かりの

点いている民家は殆どない。真っ暗な闇の中で、鳴きつづける虫の声だけが二人の聴覚を

満たした。道中を照らすのは、二人が手に持つ懐中電灯の灯りのみである。

「こんな夜中に外を歩いたの、初めてかも。なんか変な気持ち」

「なに、もしかして、怖いのか？」

「そういうわけじゃねえよ。ただちよつと、新鮮だっと思っただけ」

「何それ。分けわかんないよ」

二人は互いに軽口をたたき合いながら、コンクリート小屋を目指した。そして五分ほど

歩き、林の入り口へ到着した。

「瀬山さん家、電気消えてたね」

「こんな時間だし、寝てるだろ。まあ俺たちにとっては都合がい

いけど。それより早い
とこ先進もう」

林の入り口から奥を覗き込むと、闇は一層濃さを増していた。今
からこの闇の中に踏み

入ることを考えると、武は少し気が引けた。

「夜の森ってなんか不気味だな」

「……うん。ちょっと想像した以上かな」

真夜中の森の威圧感に畏怖しながらも、二人は意を決し、森へ足
を踏み入れた。

落ち葉を踏みしめる音があたりに響き渡る。歩いていると、時折
名も知らぬ鳥の鳴き声

が静寂を破った。二人は迷わぬよう、微かなに残る道の痕跡を辿っ
た。

「道、あつてるよね……？」

「だと思っただが、周りが真っ暗で何処歩いてるかわからん」

「そっか。迷ってなければいいけど……」

二人は俄かに不安を抱いた。夜の森が、これほどまでに方向感覚
を鈍らせるものだと

思っていなかったのだ。しかし頼れるものは微かに残るわだちしか
なく、二人はただ、足

元の道だけを信じて進んだ。

「昨日辿り着けたんだ。今日だって大丈夫さ」

「うん。でも、そろそろ着いてもいい頃だけど……」

「そうだな……ん？ おいあれ、そうじゃないか？」

武が前方に何かを発見し、声を上げた。暗闇の先にぼんやりとコ
ンクリート小屋らしき

物とが見える。しかしこの距離では電灯の光が届かず、本物かどう
かは判断できない。二

人はそのコンクリート小屋らしきものを目指し、足場の悪い道を進

んだ。懐中電灯の明かりが近づくにつれ、徐々にその姿が明らかになる。現れたのは、暗闇の中にひっそりと佇む、目的のコンクリート小屋だった。

「やっと到着したか……。それにしても、この小屋夜に見ると気味悪いな」

電灯のあかりで照らし出されたコンクリート小屋に、武は人を寄せ付けぬ邪悪な雰囲気を感じた。まさに、暗闇とフェンスとで厳重に防護されているかのような。

「そんな事思ってる暇無いよ。ほら、早速穴掘ろう」

「……はいはい」

二人は小屋の裏側のへと回りこんだ。小屋を囲っているフェンスに近づく。

「それじゃあ前回同様に、ここを掘ろう。はい、軍手」

二人は軍手を装着し、シャベルを握った。それから奈緒が、地面に勢い良くシャベルを突き立て、穴を掘り始めた。それを見て、武も穴掘りへ加わる。

二人は一心不乱に穴を掘った。土をえぐる音が、不気味に森の中へ吸い込まれていく。

「……なんだかこうして真夜中に穴掘っていると……死体を埋めるみたいだね……」

「……おいおいよせよ……この状況だけでも怖いってのに……」

「……やっぱ怖いんだ……ふふ……」

それからしばらく、二人はわき目も振らず、穴を掘り続けた。掘り始めてから一時間弱、

ついに二人は、人一人通り抜けられるほどの穴を掘り抜いた。その頃には、二人は大量の

汗を滴らせていた。

「ふう……。こんなもんで十分だろ……」

「よし。じゃあ私が先に、フェンスの中へいくよ」

奈緒は、掘りぬいた穴を早速くぐってみることにした。初めに下半身を潜り込ませ、そ

の後二本の腕を巧みに動かして上半身を徐々に押しやっていく。

「武、見てないで私の体押してよ。狭くてうまく進めないの」

「はいはい。いくぞ……それっ！」

武の助力で、奈緒の体は少しずつ前へと進んでいく。それから格闘すること数分、奈緒

はようやくフェンスの向こう側へ抜け出ることに成功した。奈緒は体についた泥を払いながら言った。

「よっしゃ。それじゃありユツクをこっちに渡して。そうしたら

次は武の番だよ」

「おし、わかった」

武はフェンス下の穴から、リュックを奈緒に手渡した。次に武は自らに気合を入れると、

奈緒に習って下半身を穴に潜り込ませた。そのまま体を押し入れるようにして、前進を試

みる。しかし、やはり自らの力だけでは思うように進まない。

「駄目だ、さっぱり進まん。奈緒、すまんが、そっちから足引つ張ってくれ」

「よしきた。……う、重いな……じゃあ引つ張るよ……それっ」

奈緒は武の両足を抱えると、ずるずると武の体を引きずり始めた。みるみる武の体がフ

エンスの向うに吸い込まれていく。そしていくらかも時間が掛からぬうちに、武はフェンス

の向うへ抜け出ることができた。武は起き上がると、驚きの表情で奈緒を見遣った。

「……お前、すごい力だな……」

「そう？　ありがとう」

「嬉しいのかよ……まあいいけど。それより、早いとこ次に移ろう」

二人は次いで、コンクリート小屋側面の窓下へと向った。窓は二人の身長よりも高い位置に取り付けられており、中を窺うことはできなかった。

「やっぱり窓高いね。武、屈んで踏み台になって」

「了解。頼むから、乗るときは靴を脱いでくれよ」

「わかってる、わかってる。ほら、さっさと屈む」

武は渋面を作りながらも、いさぎよく奈緒の指示に従い、その場で四つ這いの体勢をと

った。武が四つ這いになると、奈緒は履いていた靴を脱ぎ、足元を確かめるようにして、

武の背の上に立った。奈緒が武の背の上に立つと、丁度目線的位置に窓が現れたので、奈

緒は懐中電灯で窓の向う側を照らし、中の様子を窺った。

「おい奈緒、なんか見えるか？」

「うーん……暗くつてよく見えないけど、部屋の真ん中に、下へ降りる階段みたいなの

が見える。見渡して見たけど、他にはなーんもなさそう」

「降りる階段ってことは、地下があるってことか？　こんな小屋に地下だなんて、なんか変じゃないか？」

「でもあれ、絶対階段だよ。階段の奥までは見えないけど、明らかに下まで続いている」

「そうか……とりあえず一旦降りてくれ。背中が痛い」

室内を一通り見終え、奈緒は一旦地上へと降り立った。そして中で見た詳細を武へ伝え

た。

「ふむ……。それでお前、やっぱり階段の下へ降りたいと考えてるのか？ 危険な気がするが……」

「だってここで引き返したら、私達ここへ何をしに来たのかわからないじゃん。私はいくよ」

「なにがあるか分からないんだぞ？ しかも一人でなんて、絶対に危険だ。一度引き返して計画を練り直した方が……」

「危険なのは分かってるよ。でもここまで来たんだから、絶対に行く。でないと帰れない。これは私のプライドの問題なの」

「お前はいつもそうだな……。わかったよ、お前の好きにしろ。」

その代わり、やばいと感じたら直ぐに戻れ。わかったか？」

「うん、それだけは約束する。わがまま言ってごめん。……じゃあ窓の鍵開けるから、

もう一度屈んでもらっていい？」

「了解。くれぐれも無茶はするなよ」

奈緒の身を案じ、小屋の中に入る事を反対した武だったが、奈緒の強い意志に根負けし、

最終的に、二人は計画を続行することで合意した。

次の行程は、窓の内側に取り付けてある鍵を開錠するため、窓に腕を通すことのできる

穴を開ける作業だった。その為、武は再び四つ這いの体勢をとり、奈緒の足場となった。

奈緒は作業に使用する道具をリュックから取り出すと、それを持って再び武の背の上に立

ち、窓の鍵開け作業へと取り掛かった。

「どうだ、いけそうか？」

「このタイプなら、多分大丈夫……よいしょ」

奈緒は窓枠とガラスの間に手にしたドライバーを差し込むと、力強くそれを引いた。す

るとこの原理でドライバーの先端部分のガラスが破損し、同時にガラスの割れる鋭い音

が辺りに響いた。直後、小屋の内側に落ちたガラスの破片が、地面に着地して乾いた音を響かせた。

「割れた……こんなにうまくいくとは」

「試したこと無かったのかよ。まあ経験あるほうが問題だが」

「ネットで知ったやり方だったんだよ。とにかく、窓開けるよ」

「おう。怪我しないように気をつけるよ」

奈緒はガラスが割れてできた穴に腕を通し、内側から窓の鍵を開錠した。その後腕を穴

から引き抜き、窓をスライドさせると、小屋への浸入路が完成した。

「開いたね。それじゃあ私、中はいるよ」

「割れたガラスに気をつけるよ」

奈緒は人一人通れるほどの穴の縁に両手を掛けた。そして勢い良く飛び上がると、その

まま穴の中へ体を入れ込んだ。その体勢で更に足を引き上げると、

懐中電灯で足元を確認

した後、窓の向こう側へと着地した。こうして奈緒と武は、コンクリートの壁一枚を挟み、

互いに隔てられてしまった。

「大丈夫か？ 結構高さあっただろ」

「うん平気。少し中を見渡してみるね」

奈緒は懐中電灯を構えると、部屋の隅々を検分し始めた。懐中電灯の明かりに照らされ

た埃が、無限に中を舞っている。どうやら長い間換気がされていないようだ。奈緒は、室内に何かしらこの小屋の用途を示すものがあるかと期待したが、検分し終えてみると、その様なものは一切見当たらず、それどころか、普通は置かれていてもよいはずの棚や机の

類、その他物品等が、なに一つとして置かれていなかった。恐ろしく殺風景な部屋のと真

ん中に、地下へと下る階段だけが存在していた。その事実、奈緒はなにか、空恐ろしさ

のような感情を抱かずにはいらなかった。しかしそれと同時に、奈緒の中には、倒錯した好奇心のような感情も芽生えていた。

「武、やっぱり階段の他には何も無いよ、この部屋。物一つ置いてないもん。それに、やたら誇りっぽい」

「やっぱり、今は使われてい小屋なのかもな。何かの理由で、打ち捨てられたのかもしれない」

「うーん。それにしても、物の置かれていた形跡が無いような……」

「そんなの、物を撤去したときに、部屋を掃除しちゃったからだよ。……なあ、もう何も無かったんだから、帰ろうぜ。小屋の中に入れたってだけでも、十分目的は達成できただろ」

「それは駄目。まだ階段の下を調べてないもん。この下に何かあるかもしれないし」

「はあ。もう何も残ってないだろ……。しかしまあ、地下を調べてお前の気が済むのな」

ら、俺はもう止めはしない。どうせ止めたって、聞かないだろうけど」

「ありがとう。地下に何も無かったら、今度は潔く帰るから」

「是非そうしてくれ。地下はただの倉庫でしただってオチを期待してる」

「はは、もしそうだったら笑えるね。それじゃ、早いとこ調べてくるよ」

「おう。何度も言うけど、何かあるか分からないんだから、気をつけて行けよ」

「うん。危ないと思ったら直ぐ戻るし、何かあったら大声出すから。……じゃあ行ってくる」

奈緒はコンクリート越しの会話を終えると、単身、地下へと続く階段を下っていった。

武には引き上げることを提案されたが、結局沸き起こる好奇心に抗えなかったのだ。奈緒

の階段を下る足音が、一段下る度に武の耳に届いた。武にとって、暗闇の中で唯一その音

だけが、奈緒の存在を示す拠り所だった。しかしその音も徐々に遠退き、やがて届かなくなつた。

——地べたに座り込み、真っ暗な夜の闇の中で一人、武は奈緒の帰りを待っていた。腕

時計を電灯で照らし、時刻を確認する。時刻は午前二時を回ったところだった。奈緒が地

下へ向ってから、凡そ十五分が経過している。もうそろそろ戻ってきててもよい頃合なのに、

いまだ音沙汰が無いので、武の心には俄かに不安の色が兆していた。

まさか、奈緒の身に

なにかあったのではないか。そんな事を思い始めた時、不意に、コンクリート小屋の中から、階段を上る足音が、微かだが聞こえてきた。武は立ち上がり、小屋の中へ呼びかけた。

「おい奈緒、戻ってきたのか？」

しかし、返事は無かった。それでも、届く足音が次第に大きくなっていることから、足

音の主がこちらへ近づいてきていることはわかった。武は相手からの応答が無いことを怪訝に思いながらも、とりあえずは、無事に奈緒が戻ってきたことに安堵し、地上へ到達するのを待った。やがて足音は止み、小屋の中から声が掛けられた。

「武……ただいま」

少々弱々しい声音ではあったが、その声は紛れも無い奈緒のものだった。武は奈緒の声を聞いてすっかり安心してしまい、その時は奈緒の声音の変化などにはまったく気付かなかった。

「おかえり奈緒。というか、呼びかけたら、返事くらいしろよな。こう見えて、結構

心配してたんだぞ。まあ話は後だ。今から縄梯子をそっちに渡すから、それを使って戻って来い」

武はそう言うのと、リュックの中から今朝作製した縄梯子を取り出した。そして縄梯子の

一方の端を掴むと、もう一方の端を窓穴から小屋の中へ投げ入れた。

「こっちの端を俺の体重で押さえつけてるから、そのまま登って来いよ。まさか、お前

が俺より重いつて事は無いよな。はは」

武は、自らの冗談に奈緒が何かしら反応を示すとはかり思っていたが、予想に反して、

帰ってきたのはまたも沈黙だった。奈緒を怒らせてしまったと思い、どうしたものかと考

えあぐねていると、急に踏み押さえていた縄梯子がずしりと重みを増した。そして縄が軋

む音と共に、奈緒の頭部が窓の向こう側に現れた。

「さっきの冗談だからさ。そんな怒るなっ」

「え？ ……ごめん、聞いてなかった。とりあえずそっちへ降りるね」

奈緒は窓枠に体を引き込むと、中に浸入したときと同様に、コンクリート小屋の外へと

飛び降りた。すかさず武が近寄り、声をかける。

「お疲れ奈緒。ちゃんと戻って来れてよかったよ。俺、お前の身に何かあったのかと思

って、心配したんだぞ。まあ無事に帰ったんだし、良ししよう。

それで、地下は一体ど

うなっただんだ？ もしかして、秘密宗教の集会所だったと——」

「何も無かったよ！ ……本当」

武の言葉を掻き消す様に、奈緒が唐突に発言した。急に奈緒が大きな声を出すので、武

は驚いて奈緒の方を見遣った。良く見れば奈緒の体は、夏場だと言うのに小刻みに震え、

電灯に照らし出された表情は、ひどく青ざめているように見えた。

「どうしたんだ？ すこし顔色悪いぞ。 ……地下で何かあったのか？」

武が尋ねると、奈緒は平静を装うようにして言った。

「う、うつん、何も無い。武の言ったとおり、ただの倉庫だったよ。 ……はは」

武から見た奈緒の態度は、地下に向う前と今とでは、明らかに変

化していた。普段の覇

気に溢れる態度とは違い、今の奈緒は、まるで何かに怯えている様な、弱々しい印象を受

けた。視線は下方に固定され、心ここにあらずと言った様子だった。

「……そうか。なあ、体調でも悪いのか？ さつきから震えてるみたいだけど。風邪引

いてたりしたらまずいし、今日はもう帰ろうぜ？」

「うん、そうだね……帰ろう」

奈緒の体調が優れないこともあり、二人は足早に引き上げることにした。作業で使用した道具類を片付け、フェンスを潜る。その後、忘れ物が無いことを確認し、森の出口へと歩き出した。

帰路の間、奈緒はずっと武の後ろについて歩いた。行きの賑やかさとは違い、帰りの奈

緒は終始無言で、武が時折話しかけても、どこか上の空だった。武は依然として体調の優

れぬ奈緒を心配し、はぐれない様奈緒の手を取ると、帰路を急いだ。十分も掛からずに森

を抜け、そこから五分ほど歩き、奈緒の自宅に到着した。

「お疲れ様。いやー疲れた。けれど、なんだかんだで楽しかったな。いい思い出になった」

「うん、そうだね……」

「それにしても、明日休みでよかった。今から寝たんじゃ、起きるのはお昼頃になるか

らな。お前も体調悪そうだから、ゆっくり休めよ」

「うん、わかった……」

「奈緒……お前本当に大丈夫か？ これ以上悪化するようなら、

無理せず病院に行った

方がいいぞ。とにかく今日はゆっくり休め。それじゃあ、おやすみ」

「うん、おやすみ……」

二人が互いに別れを告げ、その日は解散となった。奈緒はおぼつかない足取りで、まるで魂の抜け殻がさまよう様に、ふらふらと玄関へ向っていった。奈

緒が自宅へと入るのを

見届けた後、武も自宅へと歩き出した。

武は自宅への帰路、別れ際に見た生気を欠いた奈緒の顔を思い出していた。武と奈緒の

付き合いは長いが、あのように憔悴した表情を武は今までに見たことが無かった。どんな

時でも周囲には明るく振舞っていた彼女が、あのような表情を見せるのは驚きだった。そ

れが体調不良から来るものなのか。あるいは別の理由から来るのかは、今の時点で武には

知る由も無かった。とにかく、明日また、武は奈緒の様子を見に行くことに決めた。

自宅へ到着した武は音を立てぬよう玄関の扉を開いた。皆が寝静まっていることを確認

し、足音をしのばせて自室へと向う。自室に入ると、汚れたジャージを母親に見つからぬ

ように仕舞い、そのまま布団へと倒れこんだ。すると今日一日の疲れが武の体に波のよう

に押し寄せ、最前の出来事の余韻に浸ることもなく、武はすぐさま泥のように眠ってしまった――。

「武、いつまで寝てるの！ 起きなさい！」

室内に怒声が響き渡った。お昼を過ぎても起きる気配のない武を、武の母親が起こしに

来たのだった。母は武の部屋の窓を開放すると、更に声を張り上げた。

「一体昨日何時まで起きてたの！ もうお昼ご飯できてるんだから、いい加減下へ降りてきなさい！」

騒々しい声に、武はまどろみから引きずり出された。開かれた窓から、真夏の陽光が武の顔面へ容赦なく降り注ぐ。

「……わかったから……大声出すなって……」

武が母にお座なりな返事を返すと。母は怒気覚めやらぬといった風に、階下へ下っていった。

武は寝ぼけ眼をこすりながら体を起こすと、布団から出て開け放たれた窓辺へと歩み寄った。

外はあきれるほどの快晴で、蝉は今日も、短い命を謳歌するかのごとく鳴き続けている。

欠伸をした後に、一度大きく深呼吸し、頭に新鮮な空気を取り入れる。そこでふと、昨夜の奈緒の事を思い出した。

コンクリート小屋の地下から戻ってきた後の奈緒は、ひどく体調が悪そうだった。あれから奈緒の体調は、幾分か良くなったのだろうか。実際に訪ねて

様子を見た方が良いだろう。武は奈緒宅へ向う為、手早く昼食を済

ませることにした。

武は一階の台所へ降りると、真先に冷蔵庫のドアを開いた。中にはラップに包まれた、母の作った冷やし中華が入っていた。それを、麦茶の入った容器と一緒にテーブルへと運んだ。流しで手を洗い、コップを持ってテーブルに着くと、コップへ麦茶を注ぎ、食前の挨拶も無しに、冷やし中華へ箸をつけた。母の料理の腕前か、あるいは朝食を食べているく、空腹だったせいか、その冷やし中華が格別に美味しく感じられ、武は夢中で箸を進めた。

武が昼食を食べていると、武の母が台所に顔を出した。そのまま流しに向かい、コップを水ですすぎながら母は呟いた。

「そういえば今朝、奈緒ちゃんがあんたを訪ねてきたわよ」

「え、本当？ 何時頃？」

「十時頃かな。武はいますかーって聞かれたから、武はまだ寝てるって言ったの。それ

で私が起こそうかって聞いたら、ううん、いらないうて。それでそのまま帰っちゃった」

「その時の奈緒の様子、どんな感じだった？ 体調悪そうだった？」

「体調？ うーんどうだったかな。あまりよく覚えてないけど、少し顔色が悪かったよ

うな……。それと目の下に少し隈がでたかも。何、奈緒ちゃん風邪でもひいての？」

「ううん、ただちょっと気になっただけ。母さん、俺飯食ったら、

ちよつと奈緒の家に

行つて来るから」

「行つてもいいけど、あまり遅くならない内に帰ってくるのよ」

母はそついい、麦茶をコップに注いだ。

武は奈緒が今朝自分を訪ねて来ていた事実を知り、さらに不安を募らせた。母の証言か

らして、体調も優れていないようだ。のんびりと昼食を摂っている場合では無いことを思

い出し、駆け足で昼食を終えると、早々に身支度を済ませ、自宅を後にした。

「ごめんください」

奈緒宅に到着した武は、玄関の扉を開き家の中へ向つて来訪を告げた。すると程なくし

て奈緒の母親が姿を現した。

「あらたけちゃん、こんにちは。奈緒に会いに来たの？」

「はい。あの、奈緒は？」

「奈緒なら、今日はずっと自分の部屋にいるから行つてみて。後で、お菓子持つてくわ

ね」

「すみません。お邪魔します」

武は軽く頭を下げると、宅内へ上がり、二階にある奈緒の部屋を目指した。奈緒宅へは

これまでに幾度と無く訪れているので、内部構造は我が家のように把握している。部屋の

前に着くと、扉の前に立ち、軽くノックをした。

「奈緒。俺だけど、入ってもいいか？」

扉の向うに耳を済ませたが、返事の返ってくる気配は無かった。その場で開けようか開

けまいか迷っていると、唐突に目の前の扉が開いた。

「……良く来たね、入って」

奈緒が目の前に立っていた。奈緒は武を室内へ入るよう促すと、自らは直ぐに室内へ引き上げてしまった。

扉が開いた瞬間、武と奈緒は正面で向かい合う形となったが、その時武の目に映ったの

は、明らかに容態が悪化している彼女の姿だった。顔は青白く、目はすわり、武の母の言うとおり見の下には隈が見て取れた。

その顔を目撃した瞬間、武は思わず、その場に数秒ほど立ち尽くした。普段の彼女とはまるで違う姿に、ショックを隠せなかったのだ。

武は我に返ると、呼吸を整え、額の汗を手でぬぐい、室内へ足を踏み入れた。

武には見慣れた奈緒の部屋。奈緒は開かれた窓の前に立ち、外をじっと眺めていた。武

の位置から見た窓の外には、遠くの方に太平洋の大海原がきらきらと輝き、その上を海鳥

の群れが右へ左へと飛び回っていた。窓辺に吊るされた風鈴が、時折優しい音を鳴らした。

——少しの沈黙が流れた後、武が口を開く。

「えっと、今朝俺を訪ねて来てくれたみたいだな。俺寝てたみたいで、ごめん。……そ

れで奈緒、あれから体調の方はどうだ？ 顔色はあまりよくないようだけど……」

武が問い掛けると、奈緒は武の方を振り返ること無く、呟いた。

「……私、昨日の夜から眠れないの」

「えっ、眠れないって、どうして？」

奈緒の言葉に、武は驚きの声を上げた。奈緒がこちらを振り返る。疲弊しきったその表情は、

情は、武の心を痛ませた。武の問いかけに、奈緒が答える。

「勘違いしないでね。別に体の具合が悪いつて訳じゃないから。ただ、気になることがあつて、それについて考えてたら、いつの間にか朝になってたの」

「十分体調悪そうだぞ……。それで、気になることって、なんだよ？」

「……それは……ごめん、言えない」

「言えないって……もしかして、昨日の夜のことに関係してるのか？」

「……言えない」

それからしばらくの沈黙。扇風機の回る音も、風鈴の揺れる音も、蝉の声も、その沈黙

に溶けるようにして消えていた。蒸し暑い室内に、窓から涼やかな風が吹き込み、武の火

照った体を冷ます。そして、俯いていた奈緒が顔を上げ、静かに切り出した。

「……大丈夫。もう私なりの結論は出たから。……もし明日、学校で会うことができれば、全部話すよ」

「会うことができたらって、どういう意味だよ」

「……それも言えない」

「なんだよ！ 意味わかんねーよ！ 言えない言えないって。要するに、俺なんかには相談できない事なのかよ？」

「違う……違うの。そういう意味じゃなくて……。ただ、今は話せない理由があるの。」

全部終わったら、きちんと話す。だから、今はお願い……許して……

…」

奈緒の頬に、一筋の涙が伝った。身も心も疲れ果てた奈緒の姿を見て、武は居た堪れない気持ちになった。同時に、つい感情的になり、奈緒にきつく当たってしまった自分に激しく自己嫌悪した。そして、自分が何故ここに訪れたのかを思い出す。

「奈緒……ごめん。お前は全然悪くないのに、責めるようなこと言って……。でも俺、お前が苦しんでる姿見てられなくて、助けてやりたいと思ったんだ……。それだけは、分かってくれ……」

「……うつん、悪いのは全部私……。ごめんね……。明日になったら話すから……。約束する……」

「……わかったから、今日はもうゆっくり休め。さすがに寝ないと、体壊すぞ」

「……そうだね。すこし寝させてもらおうかな……」

「おう。ぐっすり寝れば、明日には元気になってるだろ。それじゃあ、今日はもう帰る。」

明日、学校休むんじゃないぞ」

「……うん。ありがとう」

武は出入り口のほうへ向きかえり、部屋を出ようとした。その時、武の背中に呼び止める声が掛けられた。

「武」

「……どうした？」

武が振り向く。すると、精一杯の笑顔を湛えた奈緒が、少し間を置いておいた後、呟いた。

「……また明日、学校で」

「おう、早く元気になれよ」

片手を手を挙げ、武は奈緒の部屋を後にした。玄関へ向う途中、奈緒の母親に出くわした。

「あら、もう帰るの？　これからお菓子持って行こうと思ったのに」

「すいません、奈緒、少し体調悪いみたいなので、帰ります」

「あらやっぱり？　実は今朝から体調悪そうだったのよ。本人は大丈夫って言ってるんだけど……。ごめんね、わざわざ来てもらったのに。また今度遊んであげてね」

「はい。今日は栄養のあるものでも作ってあげてください。お邪魔しました」

母親に礼を述べると、武は玄関を出た。

庭を少し進み、振り返る。二階を見上げると、開け放たれた窓に、奈緒の姿があつた。

もの悲しそうな目で、窓の外を眺めていた。武は、奈緒の力になれず、不甲斐ない自分を

恨んだ。結局声も掛けられぬまま、武は奈緒宅を後にした。

武は目覚まし時計の騒ぐ音で目覚めた。まだ覚醒しきらぬ体無理やりに起こし、窓辺

に向う。カーテンを開くと、空には黒々とした曇天が広がっていた。窓を開くと、雨粒が

数滴、顔を打った。昨日の予報では、これから本降りになるそうだが、武は窓を閉めると、

朝食を摂る為一階へと向った。

台所では、小学二年生の武の妹が朝食の最中だった。名は沢田楓『さわだかえで』と言う。

「おはよう兄ちゃん。今日雨だった」

「知ってる。母さんご飯」

武が妹の隣の席に着く。すると間もなく武の前に朝食が並んだ。

武が朝食をつついていると楓が言った。

「兄ちゃんにお手紙届いたって」

「手紙？ 誰から」

「わかんない」

手紙をくれる者など、武には心当たりがなかった。差出人が気になり、母に問う。

「母さん、俺に手紙よこしたのって誰？」

「ん、さあねー。封筒には『沢田武様へ』しか書いてなかったから。その棚に置いといたから、後で持っていったね」

「ふーん。わかった」

朝食を終え身支度を済ませると、武は差出人不明の手紙を持って二階の自室へ向った。

制服に着替え学校へ行く準備が整うと、例の手紙に手を伸ばした。封筒は長形4号の茶封

筒で、差出人の住所や氏名などは記載されていなかった。宛先の住所もなく、ただ『沢田

武様へ』という字だけが、真ん中に大きく書かれていた。宛先が記載されていないと言う

ことは、この手紙を書いた本人が直接武宅の郵便受けに投函したということだ。しかし武

には、知り合いの中にこんな事をしそうな人物が思い当たらなかった。宛名以外に何も

記載されていない封筒を不審に思いながらも、武は封筒を開封してみることにした。封筒

の上端に指を掛ける。その時、当然に武の部屋の扉が開かれた。

「兄ちゃん、私がこの前買った水玉の傘しらない？」

扉の向うには、妹が怒気を孕んだ表情で武を睨み付けていた。どうやら、お気に入り

の傘が見当たらないらしい。

「しらねーよ。母さんに聞いたのか？」

「お母さん知らないって。もー買ったばかりなのに！ 兄ちゃんも捜してよ！」

「あーはいはい。わかったから騒ぐな」

これから封筒を開封するつもりだった武だが、妹に傘捜しをせがまれた為、やむなく開

封を断念した。武は手に持つ封筒を通学鞆に入れ、妹の傘探しへと加わった。

「散々人を疑つといて、結局自分の部屋に置いてたのかよ」

十五分ほど搜索し、傘は見つかった。妹が自分の部屋に保管して

いたのを忘れていたのだった。

「兄ちゃんごめん、わすれてた。あ、やばい、早く学校行かないと遅刻する！」

「げ、こんな時間かよ。俺も急がないと」

気付くと、時間は武がいつも家を出る時刻を過ぎていた。急いで自室に引き返し、通学

鞆をひったくる。そのまま一階へ下ると、傘立てから傘を一本抜き取り、玄関を出た。

「いつてきまーす」

外に出ると、雨は起床した時よりも勢いを増していた。辺りに漂う土の香りが鼻につく。

武は雨空に向けて傘を開くと、体をすぼめるようにして歩き出した。休み明けに雨が重なるという最悪のコンディションに、武はひどく憂鬱な気分登校することとなった。晴れているときよりいづらか気温が低いのが、せめてもの救いだった。

生徒玄関に到着すると、生徒用の傘立ては多くの傘で埋まっていた。始業の時間は迫っ

ている。武は必死になって開いてる場所を見つけ出し、傘を差し込んだ。そのまま急いで教室へと向う。

教室の扉を開けるのとはほぼ同時に、始業を告げるベルが鳴り響いた。どうやら辛うじて

遅刻せずに済んだようだ。武は胸を撫で下ろし、一番窓際の後ろから二番目にある自分の

席に向った。席に着くと、後ろの席の？塚本翔？『つかもとしょう』が声を掛けてきた。

「おいあぶねーな武。寝坊か？」

「ちがうよ。妹のドタバタに巻き込まれてさ」

友人の質問に悠然と答える武。しかしその発言の直後、この会話になにか漠然とした違和感のようなものを覚える。

「あれ……？　なあ翔、お前いつから俺の後ろの席だっけ？」

「いつって、今年の初めに席決めた時からだろ。何言ってるんだ？」

「……そうだよな。はは、冗談冗談」

「おいおい。ボケるならわかりやすい奴を頼むぜ。つつこめないだろ。」

翔の哄笑に合わせ、笑ってみせる武。しかし心内では、先ほどの違和感について考えて

いた。当たり前の光景が、当たり前ではないような、そんな違和感。こうして友人と談笑

している自分が、とても不自然に感じられた。まるで、話す相手を間違えているような……。

——結局違和感の正体は何なのか分からぬまま、武は昼食の時間を迎えた。いつもの様

に自分の椅子を後ろへ振り向かせ、翔の机に自らの弁当を並べる。

そのまま翔と向かい合

う形で、武は弁当を食べ始めた。しかし食べだして間も無く、また

もや武を襲う例の違和

感。直後に軽い眩暈に覚え、視界が霞む。武は箸を弁当箱の脇に投げ出すと、耐え切れず

額に手をあてがった。

「……大丈夫か？　具合悪いみたいだけど……」

体調の悪そうな武を気につけ、翔が訊ねた。

「……ああ大丈夫。ちよつと眩暈がただけだ……」
眩暈はすぐに治まり、視界も徐々に明瞭さを取り戻してく。しかし例の違和感だけは、
どうしても拭い去ることはできなかった。違和感について考えることを諦め、再び弁当へ
手を伸ばす。いつもと何一つ変わらないはずの、母親手製弁当。その味が、何故だか普段
より味気なく感じるのだった。

昼休み。武は今朝から開けられずにいた封筒を開封してみることにした。糊代の部分を
指で慎重にちぎり、中の手紙を取り出す。
手紙は一枚で、文の最後には手紙を書いた人物のものであろう名前が記されていた。

差出人の名は……桂木奈緒。

「桂木奈緒？ 誰だろう、知らない名前だ」

武は、桂木奈緒という人物に心当たりが無かった。その名前から考えるに恐らく女性だ

ろうが、クラスメイトには桂木奈緒という名前の生徒は在籍していないし、武の通う中学

校内でも桂木奈緒という名前は聞いた事が無かった。いくら考えたとして差出人がわかるは

ずもなく、とりあえずは先に本文の方に目を通してみることにした。

「おい……なんだよこりゃ」

文面に一通り目を通す頃には、武の眉間にしわが刻まれていた。

というのも、その手紙
の内容があまりに奇妙で、気味の悪い内容であったからだった。内容を要約すると、次の
ようになる。

武と私（桂木奈緒）は昨夜（手紙を記した日の前夜と思われる）、コンクリート小屋

（どこかに存在すると思われる）に忍び込んだ。

武はコンクリート小屋の外で待機し、私一人で小屋内部の地下へと降りた。

私は小屋の地下で、何かを目撃した。（記述によると、それは奇怪で恐ろしいものらしい）

その何かを目撃した私は、悩んだ末にある結論へとたどり着いた。そしてその結論が正

しいかどうかを実証するために、今夜（手紙を書き記した日の夜）再びコンクリート小屋

へと訪れる計画を企てた。（手紙を記した時点では計画の段階だが、この記述が事実なら、

桂木奈緒はこの後に計画を実行していると思われる）

計画を実行に移すに当たって、計画実行後に私がこの世に存在しているかどうかは不明。

以上のような内容の手紙だった。その他に文面から読み取れることといえば、この桂木

奈緒という人物は、武と少なからず縁のある人物であるということと、手紙を書いた当時、

桂木奈緒という人物は精神的に相当追い詰められていたということだけだ。

武は再び手紙を読み終わると机上に手紙を放り出し教室の天井を仰いだ。桂木奈緒、コ

ンクリート小屋、わからないことだらけだった。本当に自分宛の手紙なのかも疑っても

みたが、沢田武様へと宛名がはっきりと記載されているし、こんな小さな村に自分と同姓

同名の人物がもう一人存在するとは考えにくい。よくよく考えてみれば、宛先が記載されていない以上自宅のポストに直接投函したということなのだから、人違いということはないだろう。というのも、みるに桂木奈緒という人物は武と親しい間柄らしいので、そういう仲で武の自宅を知らないということは考えにくい。つまりこの手紙は紛れもなく、武本人に出された手紙に相違ないのだ。しかしそうすると、いよいよこの手紙の意図がわからなくなる。武は桂木奈緒とう人物もしらないし、コンクリート小屋など見たことも聞いたことも無いのだ、ここ最近の記憶を思い返してみても、誰かとコンクリート小屋へ赴いたという記憶は無いのだ。桂木奈緒とはどういう人物なのか、一体この手紙は何を意味しているのか、それとただ単に、手紙は何者かの悪戯なのだろうか。無論回答が与えられるわけも無く……。

武は果てしない思考の渦にもまれ、やがては思考する労力を失い、力なく机上へ倒れこんだ。

教師が滔々と語るのをさえぎる様に、鈴が鳴った。一日の授業は終わり、これから学校は放課後に突入する。

武の感じていた謎の違和感は、一日中武の頭の中に纏わり着いた。そしてその違和感は、いつも突然に沸き起こった。例えば授業中、先生が生徒の誰かに質問したときや、休み時間、友人と談笑しているときなどだ。そして今もまた、突然にそれは武の中に生まれた。

友人の翔が、帰宅しようとする武に声をかけた時だ。

「武、一緒に帰らないか？」

いつもは他の友人と下校している翔だが、今日に限って翔は武を誘った。何らかの都合

で、友人と帰れなくなってしまったのだろうか。いつも一人で下校している武は、その申し出を特に断る理由も無いので、快く承諾した。

「めずらしいな、まあ別にいいけど。んじゃ帰るか」

二人は揃って教室を出た。生徒玄関に着くと、これから下校しようとする生徒でこった

返していた。武は人ごみの間を縫うようにして傘立てにたどり着き、傘を抜き取った。翔は折り畳み傘を鞆から取り出して広げた。

外は相変わらずの雨で、雑巾のような色の雲が絶えず雨を滴らせていた。色とりどりの

傘を広げた生徒に混じり、武と翔も帰路を歩き出す。

天気予報によると、夜には晴れる見込みらしい。しかし予報を知

らないものが今の空を

見上げたら、とてもそうは思えないだろう。そんな雨空の中を二人は歩いた。両側を田んぼに挟まれたあぜ道を、無色透明のビニール傘と黒地の折り畳み傘が進んでいく。折を見て、武は翔へ質問した。

「なあ翔、桂木奈緒って人知ってるか？」

武は今日一日疑問に思っていたことを、翔にぶつけてみた。翔は考える素振りを見せた後で答えた。

「いやしらん。誰それ？　もしかしてお前の彼女とか……」

「だったらいいのにな。残念なことに違う。というより、俺もそいつについては全く何もしらんのだよ」

「はあ？　なんだそれ。それじゃあその桂木奈緒って奴は、お前とどういう関係の人なんだよ？」

武は事の次第を翔に話した。今朝郵便受けに自分宛の手紙が入れられていたこと。その手紙が郵送ではなく直接郵便受けに入れられたらしいこと。手紙の差出人が桂木奈緒という人物であるということ。桂木奈緒という人物やその手紙の内容にまったく心当たりが無いことなどだ。

「なるほどな。それでその手紙の内容ってのは、どんなだったんだ？」

武は鞆から例の手紙を取り出し、翔へ手渡した。翔は手紙を受け取ると、内容をよく吟味するように、目を上下左右に走らせた。そして何度か読み直した後、武へ手紙を返却し

た。

「どうだ？ 心当たりあるか？」

「うーんさっぱりだ。すまん」

右手で後頭部を掻きながら、すまなさそうに翔が答えた。

「おまえが謝ることないさ。それにしても、本当に何なんだろうなこの手紙」

「まずこの手紙が何の目的で書かれたのかだな。見た感じ、遺書と受けとれなくもないけど……」

「おいおい怖い事いうなよ。面識の無い奴にいきなり遺書送りつける奴なんているか？」

「少なくとも、暑中見舞いなんかじゃないことは明らかだ。多分、何かを伝えたがってる」

「こんな手紙で、何を伝えるって言うんだよ。きっと悪戯にきまつてる」

「悪戯かどうかは、実際にこのコンクリート小屋って所に行ってみればわかるんじゃないか？」

翔の口から飛び出した予想外の言葉に、武は思わず翔の顔を見遣った。

「本気かよ。あるわけないよコンクリート小屋なんて」

「まだ悪戯と決まったわけじゃない。それに、なんか面白そうじゃない」

「面白そうって……ただ気味が悪いだけだが。手紙の内容だって胡散臭いし」

「その胡散臭いところがいいんじゃないか。俺、こういう電波っぽい好きだぜ。俺家

に帰ったら、友達に電話でコンクリート小屋のこと知らないか聞いて

てみるよ。結果は明日、
学校で報告する」

翔は手紙の怪しげな魅力に惹きつけられたらしく。すっかり乗り
気になっている。それ
をみて武は、少々あきれ気味に答えた。

「みんな知るわけ無いよ。コンクリート小屋なんて存在しない
だ」

「別に悪戯だったとしても、楽しませてもらえただけで満足さ。
それに、本当はお前だ
って手紙のこと気になってるんじゃないのか」

翔の一言に、武は思わず口をつぐんだ。というのも、武は表面で
は手紙の信憑性を否定
しつつも、朝から感じている違和感が手紙となにか関係があるので
はないかと心密かに考
えていたからだった。

「今日のお前、なんかいつもと様子が違った。何か悩みを抱えて
るような、そんな風
に見えた。だから俺、帰りにお前を誘ったんだ。すこしでも力に慣れ
るならと思つてな。も
し俺の思いすごしなら謝るよ」

勘のいい奴だと武は思った。武は今日一日、例の違和感のせいで
鬱屈しそうな気持ちを
隠し、皆に心配されまいと強いて平静を装っていた。それでも翔に
は武がふさいでる様
に見えたらしい。

「お前にはかなわんな。実はもうひとつ話したいことがある。俺
が悩んでたのもそれが
理由だ」

武は朝から感じていた違和感のことを翔へ打ち明けた。

「……なるほどな。でもその違和感つてのがよくわからないな。

デジャブみたいなものか？」

「うーんデジャブって、この光景前に見たことあるなーってやつだろ。俺の感じる違和感ってのはそれとは逆で、日常的に目にしてる光景が、まるで始めて目にする光景のように感じるんだ。自分がそこに、うまくなじめていないような……」

「ふうん。それはいつからだ？」

「今日の朝からだな。それからなにか事あるごとに沸き起こるんだ。それも一日中だぞ。」

さすがに気がめいるよ。昨日まではそんなこと感じなかったのに……」

……」

「それは大変だな。そういえば、例の手紙が入れられてたのも今朝だな。これはオカルト的な話になるけど、もしかしたらお前が感じている違和感と例の手紙はなにか関係があるのかも知れんな」

「それは俺も思ってたことだ。でも関係してるって、どんな風になんか？」

「そこまではわからん。ただそういう可能性もあるってこと。でももし仮にそうだとす

れば、手紙の内容を探ることで、お前の違和感の正体を掴むことができるかも知れん」

「……とんでもない方向に話がすすんでるな。でも他に原因になりそうなものもないしなあ」

「そうだな。他に手がかりが無い今、手紙の内容から探るしかないだろう。そうすると、

まずは桂木奈緒という人物と、コンクリート小屋が存在するか確かめることからだな。今

日帰ったら、二人で手分けして、クラスの友達に電話して情報収集しよう。何か分かったらお互い連絡すること。いいか？」

「了解。夕飯後にでも電話してみるよ。それじゃあ電話する人を分担しておこう」

二人はクラスメイトの中でそれぞれ電話する人物を分担すると、聞き込み終了後に結果を報告する約束を取り交わし、別れた。

——「うん……そうか。いや、こっちこそいきなりごめんな。おう。じゃあまた明日」

武は受話器を電話機に戻すと、大きく溜め息をついた。

夕食後、武はあらかじめ翔と分担しておいたクラスメイトに電話をかけた。そして先ほ

ど、最後の一人への電話を終えたのだが、結果は全滅だった。桂木奈緒という人物も、コ

ンクリート小屋についても誰一人知りえるものはいなかったのだ。

容易に予想できた結果

ではあったが、いざその通りの結末を迎えてみると、やはり落胆の色は隠せなかった。休

み無しで電話を掛け続けてさすがに疲れを感じた武は、翔に結果を報告する前に少し休息をとることにした。

二階の自室に入ると、武は鞆から例の手紙を取り出し、それを持ってベットのの上に仰向

けで倒れこんだ。顔の上に手紙をかざし、今度はゆっくりと時間をかけて読み直す。一語

一句読みもらさぬよう反芻し、何度も読み返す。しかし新たな発見があるはずもなく、虚

しさがこみ上げるばかりだった。それでも武は、この手紙の意味はわからくとも手紙が発

する何かを感じ取っていた。それは例えるなら、懐かしさのようなものだった。初めは半

信半疑だったこの手紙についても、何度も読み返すうちに、決して悪戯などで書かれた文

章などではないと確信していた。そんな風なことを考えていると、突然武の部屋の扉が開

かれた。扉の外には母親が電話の子機を片手に立っていた。

「なんだよ。ノックくらい……」

「呼んだのに降りてこないあんたが悪い。翔君から電話だよ」

どうやら手紙を読むのに夢中で、母親が呼んでいるのに気づかなかつたらしい。ベット

から降り、母親から子機を受け取りに行く。

「あんた、何で泣いてんの？」

「え？」

母親に言われて気付く。武は自分頼に触れてみると、涙でぬれていた。いつの間に涙など流したのだろうか。

「あれ、なんだこれ。……まあいや、とりあえず電話」

武は母親から受話器を受け取り、受話器へ向った。

「もしもし、翔か？」

「こんばんは武。調子はどうだ？」

「……残念ながら全滅だった。全く手がかりなし。そっちは？」

「実はだな、コンクリート小屋を知ってるかもって奴が現れた」

「え！ 本当か？ どこにあるって？」

翔からの予期せぬ朗報に、武の受話器を持つ手に力が入る。

「まあまあ。まだ例のコンクリート小屋って決まったわけじゃない」
「詳しく話してくれ」

「おう。これは勇人からの情報なんだが、勇人が小学生の頃、山に入って遊んでるときに偶然そのコンクリート小屋を発見したらしい。場所は……瀬山さんってわかるよな？」

漁協の組合長してる人。その瀬山さん家の裏の林の中だそうだ」

勇人というのは武のクラスメイトの名だ。どうやら彼が、小学生時代に例のコンクリート小屋を見たことがあるという話らしい。

「瀬山さん家の裏の林……。それで、中には入ったのか？」

「いや、当時は小屋の周りにフェンスが建ててあって入れなかったらしい。今はどうなってるか知らないが」

「そうか。確かめてみる価値はありそうだな」

「うん。明日の放課後にでも行ってみようぜ。それと桂木奈緒の方だけど、こっちのほうは残念ながら手がかりがなかった。すまない」

「お前が謝ること無いよ。でもそうなってくると、この桂木奈緒って奴は何者なんだろ」

う？ これだけ聞き込みして誰も知らないってことは、地元の人ではないのかな」

「そうかもしれないな。もしくは、本当に実在しない人物なのか……。明日コンクリート小屋に行つて、何かわかればいいな」

「うん。とにかく明日だな。……それと、今日は色々とおやすすな」

「やめろつて。謝られるようなことはしてないぞ。それに、俺も久々に楽しませてもらったよ。ありがとう」

「お前って奴は。明日も頼んだぜ」

「おう、まかせとけて。そんじゃ、おやすみ」

「ありがとな。おやすみ」

翔に礼を告げ、武は通話を終了した。桂木奈緒については依然として何も分らないま

まだったが、幸いにも例のコンクリート小屋に関係するかも知れぬ情報を得ることができ

た。他に手がかりが無い今、そこから辿っていくしかよりほかないだろう。期待と不安が

ない交ぜになったような気持ちを抱え、武は再び例の手紙へと向っていった――。

翌日、登校を終えた武は朝のHRが始まるまでの間、翔と昨日の話をまとめていた。

「俺今朝、両親や妹にも、桂木奈緒のこと知ってるか聞いてみたんだ。けど皆そんな人知らないってさ。近所に桂木って苗字の夫婦が住んでるけど、名前も違うし、子供もないから恐らく無関係だと思う。というわけで、こっちも桂木奈緒についてはさっぱりだったよ」

「桂木奈緒についてはどちらも情報なしか。まあ、コンクリート小屋の情報が手に入っただけでもよししよう」

「うん。昼休みになったら、勇人に詳しく聞いてみよう」
二人が話しているとHR開始を告げる鈴がなり、それと同じくして担任の教師が教室へ入ってきた。昼休みに、昨夜のコンクリート小屋について情報を知っているという生徒から話を聞くことにし、二人は一時会話を終了した。

——昼休み、昼食を終えた武と翔は勇人の元へ向った。勇人は友人との馬鹿話に興じているところだった。

「勇人、昨日電話で話したコンクリート小屋のことなんだけど…」

翔が声をかけると、勇人は会話を一時中断してこちらを振り返った。

「ああ、昨日の電話の話ね。でもどうしていきなりそんなこと聞いてきたんだ？」

「そうそう。お前、俺にも電話かけて来たよなー」

勇人と、勇人と談笑していた友人が、翔に猜疑のこもった視線を向けながら言った。ど

うやら、昨夜の電話の件を不審に思っているようだ。咄嗟の判断で、翔は嘘でその場を乗り切ることにした。

「……いやー実はな、子供の頃コンクリートでできた小屋で遊んだ記憶があつて、それを昨日、唐突に思い出したんだ。そしたらすごく懐かしい気持ちになつて、そのコンクリートの小屋にまた行ってみたくなつたんだ。あるだろ？ こういうこと」

「うーん……わかるような……」

「だろ？ でもどうしてもそのコンクリート小屋があつた場所を思い出せなくてな。そ

こで武にも協力してもらつて、クラスメイトに片っ端から電話してコンクリート小屋の場所を知らないか聞いてまわつたんだ。ほんと、勇人が覚えてくれて助かつたよ」

「そうなのか……あれ、それじゃあ女の人の方は何なんだ？ 確か、カツラギナオだっけ？」

またも苦しいところを衝かれ、翔はたじろいだ。隣で聞いている武も心配そうな顔で翔の顔を見遣る。翔は頭の中で必死に言い訳を考え、なんとか誤魔化そうとした。

「あ、ああ……桂木奈緒ね……。そいつはあれだよ、あれ。そう、親戚。都会に住んで

る」

「……お前の親戚のことをどうして俺たちに聞くんだよ」

「ええつと……ほ、ほら、奈緒のやつ、一度俺の家に泊まりに来たときがあつて、その時にお前らと一緒に遊んだらしいんだ。それで、お前たちのほうはそのこと、まだ覚えてるのかなーって……」

「なんか怪しいな……。なんにせよ、そんな奴と遊んだ記憶無いぜ。でもまあ小さい頃だから忘れただけかもな」

「そうか。うんうん。きっと忘れただけさ。奈緒の奴には、覚えてなかったって伝えとくよ」

なんとか相手に信じてもらえたようで、翔は胸を撫で下ろした。

そして疑問がぶり返さ

ないうちにと、矢継ぎ早に次の話題へと移行した。

「それで話を戻すけど、瀬山さん家の裏の林にコンクリート小屋があるってのは本当か？」

「ああ本当だよ。でも子供のときに見つけたから、今あるかどうかは分からないぜ」

「その時の事、詳しく聞かせてくれ」

「おう。あれは俺が小学2年か3年のときだな。夏休みにクワガタを捜して、兄貴と一

緒に早朝から瀬山さん家の裏の林へ入ったんだ。あの林はクワガタがよく採れる穴場だからな。本当はあんな奥まで行くつもりは無かったんだ。でも兄貴が、

林の深いところの方

が大きいクワガタが採れるんじゃないかって言ったんだ。それで俺ははずんと奥へ進

んでいった。クワガタ捕り夢中で、気づいたら林のかなり奥深くまで来てた。さすがに不

安になって、戻れなくなると恐いからそろそろ引き返そうかって話してたとき、兄貴が前

方に小屋みたいなものが見えることに気づいたんだ。俺は気味が悪くて、近寄るの嫌がつ

たんだけど、兄貴が近くに行ってみようって言っからさ、近づいたんだ。そしてらコンク

リートでできた小屋がそこにあつたわけだ」

「中には入れなかつたんだよな？」

すかさず翔が質問する。

「周りをフェンスで囲まれてて、小屋自体には近づくことすらできなかつたよ。フェン

スの入り口にも鍵がかつてた。日が暮れそうだったし、中に入ることをあきらめて、引

き返したよ。あれ以来あそこには行ってないな」

「コンクリート小屋までの道、まだ覚えてる？」

「当時は獣道があつたから、それを辿っていったけど、今残ってるか分らないな。も

し残ってたなら、それを頼りに進んでいけば見つかると思う」

「近くに人はいた？　あるいは人の出入りしている形跡とかあった？」

「俺が行つた時は、人はいなかったな。でも道はある程度使われてる形跡があつたから、

定期的に人が来てたのかもな。あのコンクリート小屋がなんの目的で存在してるかは分からないが」

「そうか。聞きたい情報はこれくらいかな。あとは実際に行ってみるしかない。色々教えてもらってありがとうな」

「お前も物好きだな。別にいいけど。まあ頑張れよ」

翔は勇人に礼をいうと、武を連れて自分の席へ戻った。

「翔、嘘までつかせてしまつてすまないな。全部俺の問題なのに

……」

武はひどく申し訳なさそうな顔で俯いた。個人的な話に翔を巻き込んでしまったことに、

責任を感じていた。

「お前はいちいち気にしすぎなんだよ。もうこれは二人の問題だろ。それより、もう直

ぐ夏休みだろ。夏休みに入ったら、早速教えてもらつた場所へ行つてみようぜ。今の内か

ら必要になりそうなもの準備してさ。あー今からわくわくするぜ！」

翔は面倒ごとに巻き込まれたという自覚はなく、むしろこの展開を楽しんでいる風だつ

た。その様子に、武は少しか救われた気がした。

「うん。コンクリート小屋は林の奥にあるみたいだから、ある程度は準備していかない

とな。それと小屋の周りがフェンスで囲まれてたつていつてたけど、桂木奈緒はどうやつ

て中に入つたのかな？」

「さあな。手紙には『忍び込んだ』って書いてあつたから、恐らく正攻法以外の手段で

中に入つたんだろうと思うけど、それがなんだかまではわからないな」

「ふむ。実際に現場に行つて確かめるしかないな。それにしても……こつやつて手紙の

謎を追っていると、桂木奈緒は一体どういう意図であの手紙を書いたんだろうつて、改め

て疑問に思うよ。それも、コンクリート小屋にいけば、わかるんだろうか……」

コンクリート小屋についての情報を得た二人は、数日後の夏期連休初日、教わった場所へ赴いてみることにした。

本来なら武も、目前に迫った夏休みに胸躍らせていたことだろう。しかし今の武には例

の手紙のことしか念頭になく、この一連の謎の解決なくして、夏休みを満喫しようなどと

いう気持ちにはなれなかった。夏の暑さは、まさにこれから盛りを迎えようとしている。

にもかかわらず、武は正体不明の薄ら寒さを感じずにはいられなかった――。

その日の放課後、武は自宅への帰路を歩いていた。道程も残りわずかで、数分歩けば我が家である。その道中、武宅のすぐ近所にある、「桂木」という表札を掲げた一軒の家に

通りかかった。桂木奈緒と同じ姓を持つ人の家である。

この桂木家には一組の夫婦が住んでいる。武が母から聞いたところによると、残念ながら夫婦のどちらも奈緒という名ではないらしい。また、桂木夫婦は

どちらかの両親と同居

しているというわけでもなく、子供もいない。近隣ということで、

沢木家と桂木家は頻繁

に交流のある親しい間柄だったが、武の家族の中で、桂木家に親類らしき者が訪ねてきて

いる所を目撃した者はいなかった。そういうわけで、桂木奈緒が桂木家の親戚の者である

という可能性も考えにくい。

以上の点から、武は桂木家の人物と桂木奈緒はまったくの無関係であると結論付けていた。

武が何とはなしに桂木家を眺めていると、突然何者かが声を掛けた。

「あらたけちゃん、こんにちは。何かご用？」

武が声の掛けられた方向へ振り向くと、一人の女性が買い物袋を手にはら下げて立って

いた。それは桂木家の嫁で、武がおばさんと呼んで慕っている人物だった。名は桂木奈美

『かつらぎなみ』という。印象的である、柔らかな笑みを浮かべていた。

「こんばんはおばさん。別におばさんの家に用があつたわけではないんです」

「あらそうなの。そんなところにボーッと立つてるから、何か用があるのかとおもつち

やた。どう？ 学校は楽しい？」

「ええまあ、それなりに楽しくやってます。成績のほうは相変わらずですが」

「あらあら。そういえば、もう直ぐ夏休みかしら？ でも遊んでばかりじゃダメよ。」

学生の本分は勉強なんだから」

「おばさん何だか僕の母親みたいなと言いますね」

「あらごめんなさい。ふふふっ」

——それからしばらく、二人のとりとめもない世間話が続いた。

そして話題が尽きかけた頃、武が切り出した。

「あの、おばさん。変なこと聞きていいですか？」

「なにかしら？」

武は少し考えて、例の手紙の件について聞いてみることにしたのだ。

「小母さん、カツラギナオって名前に心当たりありませんか？」

「カツラギナオさん？ うーん、初めて聞く名前ね。知り合いでそういう名前の人はい

ないし、同じ桂木って苗字だけでも、親戚にもそんな名前の人はいないわね。いったい

どういう方なの？」

「あ、知らなければいいんです。気にしないでください。実際に存在するかもわからない

い人物ですから。すみません、いきなり変なこと聞いて」

「うーん……よくわからないけど、力になれなくてごめんね。お父さん帰ってきたら、聞いてみようか？」

「いえ、大丈夫です。そんな大事な話じゃないですから。それじやあ僕、これから用事があるので帰りますね。変なこと聞いて、本当にすいませんでした」武は無用事があると嘘を言った。無論、これ以上この話題を広げられる前に、会話を切り上げるためである。

「あら、用事があったのね。私ったらそんなことつゆ知らず長話しちゃって、ごめんね。ああそうだ、この前頂いたメロン、お母さんにおいしかったって伝えておいてね」

「はい、伝えておきます。では」

桂木奈美の笑顔に見送られ、武は再び歩き出した。

武は後悔していた。どうして桂木奈美に、桂木奈緒について訊いたのか。尋ねた結果がどうなるか、予想できたはずだ。それでも訊いてしまったのは、単に話の間を繋ぐためか。

それとも、無意識にしろ武にはなんらかの思惑があったのか。

よこされた返答は予想通りなのに、武は何故だかひどく寂しく思った。そして話中、また例の違和感。その不快な違和感は、その後の道中も武の中に嫌らしく纏わりついた。

夏期連休初日、武は覆いかぶさるような暑さで目を覚ました。それからしばらくは何を

する気力も起こらず、ベットの上で横になる。

部屋の中にも、蝉の声は容赦なかった。鳴きたい盛りの彼らは、短い命を謳歌しようとするかのごとく、今日も鳴き続けていた。武は自分の無駄に長い夏期連休を、こいつ

らに分けてやりたいなどと、おかしい事を思った。その後、自嘲するようにつら笑うと、起きる為に立ち上がった。

階下に下りればいつも聞こえてくる家族の話し声、テレビの音声、家事をする音などが、

今日は武の耳に届いてこない。というのも、父は平日なのでいつものように仕事へ、母親

と妹は前から予定していた街への買い物へ出かけたのだった。前日の夜、武も一緒に買い物へ行こうと誘われたが、用事があると言い断った。

武は今日、友人の翔とコンクリート小屋探索へ赴く予定だ。正午に武宅の前で翔と合流

する手はずとなっている。しかし正午まではまだかなり時間があつた。武は人気のなくな

った家の中を歩きながら、どうしようかと考えた。とりあえずは、寝汗による気持ち悪さを洗い流すためにシャワーを浴びることにした。

武は頭から水を被りながら、浮かんでくる様々な疑問に思考をめ

ぐらした。これから訪れる予定のコンクリート小屋は本当に実在するのか。また、実在するとして、そこには一体何があるのか。桂木奈緒と名乗る人物は一体何者なのか。何を意図してこの手紙を書いたのか。はたまた、すべては何者かの仕組んだ悪戯で、自分はただそいつに遊ばれているだけなのか……。それらの謎は堂々巡りをするばかりで、結局手紙を受け取ってから今に至るまで、納得できる回答を導き出すことはできなかった。しかし武には、ひとつ心に決めていることがあった。それは、手紙の内容が事実にしる出たら目にしろ、今日を以って、この一連の出来事にけりをつけるという事だった。

桂木奈緒やコンクリート小屋については何一つ分からないままだったが、謎の違和感については変化があった。はじめは一日に何度も生じることもあった違和感が、この数日で発生する頻度が減ってゆき、今に至ってはまったくというほど生じなくなっていた。謎の違和感を病気と捉えれば完治したと言っているのだろうが、武はそういう類のものではないと思っていたので、違和感を感じなくなったことが良いのか悪いのか判断ができなかった。

武はシャワーを浴び終わると、少し遅い朝食を摂った。朝食は母が今朝作っておいてくれた物を電子レンジで温めて食べた。育ち盛りの武は、こんな時でも食欲はいつもどおり

旺盛だった。朝食を食べ終える頃には、あと三十分ほどで正午を迎える時刻だった。武はコンクリート小屋へ持ってゆく荷物を準備するために自室へと向かった。

道具類は、各自必要だと思われる物を揃えて持参することになっていた。武は昨夜揃えた道具類を一つ一つ確認しながらリュックサックに詰め込んだ。

全ての荷詰めを完了し、いざ待ち合わせ場所へ向かおうとした時だった。机の上に置かれていた桂木奈緒の手紙が目に入った。武は手紙に歩み寄ると、それを手に取った。そして何かを思案した後、それを小さく折りたたみ、ズボンのポケットに突っ込んだ。

「おす武。準備は万端か？」

武が待ち合わせ場所に到着すると、そこにはすでに翔の姿があった。学校指定のジャー

ジを着ており、背中には武同様、大きなリュックサックを背負っている。

「まあな。お前は？」

「俺はこれを持ってきた。ビニール紐」

翔は背負ったリュックサックから黄色のビニール紐を取り出し、得意顔で武の眼前に掲げた。

「そんなもん、何に使う気だよ」

「林の中で迷うかもしれないだろ。小屋に向う途中、道端の木にこのビニール紐を結び

付けておけば、帰るときの道しるべになるかなと思って」

「……なるほどな。俺、そういう事全然考えてなかった」

「いいっていいって。それより、早いとこ出発しようぜ」

話をそこに切り上げ、二人はコンクリート小屋へ向けて歩き出した――。

武の緊張とは裏腹に、翔は今回の事に意欲満々といった感じだった。道中も一人で手紙について自分の推論を語り、それはすでに、コンクリート小屋の存在を信じきっている様子だった。そうこうしているうちに、二人は小屋がある林への入り口である、瀬山宅の裏へ到着した。

「ここか、勇人の言っていた林は。確かに、うつすらと道が続いてるみたいだが……」

「この獣道を辿っていけば、コンクリート小屋にたどり着けるんだよな。でもかなり奥まで続いているみたいだぞ。大丈夫かな」

「ここまで来たんだから、行くしかないだろ。最悪、このビニール紐があるし迷うことはないさ」

「……そうだな。よし、行こう」

二人は覚悟を決め、林へ足を踏み入れる。入り口でうるさく鳴いていた蝉が、途端に鳴りを潜めた。

「なんだか薄気味悪い林だな。まだ昼だけど、幽霊でも出てきそうな雰囲気だぜ」

「桂木奈緒は、こんな林を一人で歩いたのかな」

「手紙によれば、一度、お前と一緒に来たみたいだけだな。でもお前にはそんな記憶ないんだろ？」

「うん。でも今は、とにかく進むしかない。コンクリート小屋があると信じて」

実在するかも分からぬ目的地を目指し、二人は歩いた。道標などないこの林で、頼るべきは、入り口から続くかすかに残った獣道のみだった。二人はその獣道を頼りに、慎重に

歩を進めた。途中、道脇の木に目印のビニール紐を巻きつける。少し進んだところで振り返ると、目印のおかげで来た道が一目瞭然だった。これで迷う心配はないだろう。安心して

た二人は歩を早めた。鬱そうと茂る木々の間を、奥へ奥へと進んでいく……。

翔が何個目かのビニール紐を木に巻きつけている時、武が呟いた。

「おい翔」

「ん、どうした武？」

巻きつける作業を続けながら、翔が訊いた。

「ほらあそこ。あれ、コンクリート小屋じゃないか？」

武が指差した先には、人工物らしき建物が微かに見えていた。距離にして七、八十メートル

とあったところだろう。しかしここからでは遠すぎて、例のコンクリート小屋だと断定はできない。

「ここからじゃよくわからない……。近くに行ってみよう」

二人はその建物を目指し、再び歩き出した。先ほどまで喋々しかった翔も、今では口を

閉ざしている。二人が黙すると、林全体が静まりかえったように感じられた。そのせいで、

枯れ枝を踏むパキパキという音が不自然に響いた。

二人が建物に一步近づくほどに、色、形、大きさなどが認識できるようになる。淡い灰色、角ばった外観、小屋と呼べる規模の大きさ。やがてその建物は、周囲をフェンスで囲まれていたらしいこともわかった。それはまさに、二人の想像するコンクリート小屋のイメージと合致していた。唯一想定外だった事をあげるとすれば、コンクリート小屋の発する独特の雰囲気、あまりにも異質で不気味だということだろう。それは遠めに見ても容易に感じ取ることができた。しかし二人はひるむことなく前進する。コンクリート小屋に畏怖すると同時に、湧き出る好奇心を抑えることができなかったのだ。やがて残り数メートル程の距離まで来たとき、二人はこの建物が、例のコンクリート小屋だと確信した。

「これが例のコンクリート小屋だよ。周りをフェンスで囲ってあるし、間違いない。

あの手紙の内容は、本当だったんだ……」

武はその場に佇み、コンクリート小屋を眺めた。それは林の中にはどう見ても不釣り合い

な建物だった。二十平米ほどの広さに、一辺の長さが四〇五メートル、高さ二メートル半

ほどの大きさの建物が建っている。材質は恐らくコンクリートだろう。屋根の部分は平ら

になっていて、側壁と交わる部分が三十センチほど突出している。

さらに小屋の周囲には

フェンスまで張り巡らされている。それが小屋のコンクリートという材質と相まって、外

部からの侵入を強く拒絶する堅牢な雰囲気を醸し出していた。

コンクリート小屋が実在したことに、武は驚きを隠せなかった。

しかし実物を目の当た

りにしては、武に疑うすべはない。コンクリート小屋が実在するとわかった以上、これか

らは手紙の謎を明かすことが、武の次の目的となる。

「俺は最初から信じてたぜ。コンクリート小屋は実在するって」

翔が誇らしげに言い放った。先ほどの警戒的な様子とは打って変わ

り、目は輝きを取り

戻している。

「それにしてもこの小屋、えらく怪しい雰囲気だな。有刺鉄線ま

で張り巡らしてるとは

……」

翔はそう言つて、フェンスの上部を見遣つた。見るからに痛々しい有刺鉄線が、間断なく小屋を囲っている。

「それほど嚴重にする理由があるんだろう。恐らく人を近づけない何かがある。それはもしかすると、手紙の中で桂木奈緒が語っている、地下の秘密のことなのかも」

かつて桂木奈緒は、コンクリート小屋の地下で“何か”を目撃してしまつた故に、二度、

コンクリート小屋を訪れる羽目になる。彼女そうまでさせた“何か”とは何なのか。しか

し今の二人には、それが何なのか見当もつかなかった。

「百聞は一見にしかず。直接見て確かめたほうが早いさ。とりあえずは……フェンスの中に入ることからだな」

何から手をつけていいか分からぬ二人は、一先ずフェンスの入り口を探すことにした。

二人はフェンス伝いを反時計回りに歩いた。一つ目の角を曲がつたところで、フェンスの入り口を発見する。

「ここがフェンスの入り口みたいだ。でも南京錠が掛かつてる。どうしよう」

「うーん。桂木奈緒はどうやってフェンスの中に入ったんだろう」

「よじ登つて乗り越えようにも、有刺鉄線があるからなあ。これじゃあ越えられないぞ」

「……」

「とりあえずフェンスを調べてみようぜ。フェンスが破れてるところとか、なにか抜け

道みたいなものがあるかもしれないし」

二人は二手に分かれ、フェンスのどこかに侵入できそうな箇所が

ないか、丹念に調べて

回った。少しして、何かを発見したらしい武が翔を呼んだ。

「おい翔、こっちへ来て」

すぐさま翔が武の元へ駆けつける。武は首をかしげた状態で、ちょうど目線の高さにある何かを見つめていた。

「これ見てみ。なんだろう」

見ると、縄のようなものが目の前のフェンスに結び付けられている。ロープの行き先を

辿ると、なんとコンクリート小屋の側壁上部に設けられた小さな窓を通り、小屋の内部へと消えていた。

「縄か……小屋への侵入に使ったのかな？」

「フェンスの侵入方法とは関係なさそうだな」

「うーん。とりあえずフェンスの中に入らないことにはなあ……」

翔は瞑目して宙を仰ぐと、ぶつぶつ言いながらなにかを思案し始めた。その脇で、武が

独り言のようにぼつりと言った。

「なんかこれ、縄梯子みたいだな」

実は縄は二本伸びており、その二本が等間隔で繋ぎ合わされていた。それはまさに、武

の言った縄梯子の形状をしていた。

武の発言を聞いた翔が、思考するのをやめて武の話に同調する。

「ふむ。確かに縄梯子に見えなくもない。でも梯子は小屋の内部に垂らしてあるから、

帰りしか使えないぞ。行きはどうするんだ？ここから見た感じだと、地面から窓まで結構

な高さがあるが」

「踏み台みたいな物があれば……。あ、あれ」

武は窓の真下に何かを発見した。それは地面から突き出ている棒

だった。突き出ている

棒の先端は逆三角形になっており、まるで持ち手のような形状をしていた。

「あれは……シャベルみたいだな」

よく見れば、棒と繋がった金属部分が地面からほんの少し顔を覗かせている。翔はそこから、

棒の正体がシャベルだとわかったのだ。

「なるほどシャベルか。でもうまく使えば、踏み台にできなくもない」

「うん。あとはどこからフェンスの中に入ったかだけだ……」

「よし、もう一度探してみよう」

二人は再び散ずると、フェンスやその周囲に至るまでを徹底的に検分し始めた。

——成果を挙げられないまま、探索を始めて三十分が経過しようとしていた。暑さや群

がってくる蚊のせいで、二人の体力は少しずつ削られていく。このまま探索を続けても能

率は落ちる一方だと判断した武は、一度休息することを翔に提案した。

「翔、疲れただろ？ ちょっと休憩しよう」

遠めから声を掛けると、翔は武の方へ歩いてきた。相当に疲れていたのだろう。翔は武

の傍に到着するやいなや、提案に賛否の意思を示すでもなく、無言のままその場に腰をお

ろした。続いて武も腰を下ろす。

「すまないな。こんな面倒に巻き込んで」

思わず武の口から弱気な言葉が出る。

「おいおいやめろよな。俺、全然後悔なんてしてないぜ」

「ありがとう。必ず中へ入る方法はあるはずなんだけどな……」

「そうだな。しかしこれだけ探しても見つからないんじゃないじゃ、さすがに気も滅入るぜ」

「でも俺、諦めない。決めたんだ。今日限りで、手紙の件にけりをつけるって」

武はズボンのポケットに手を入れると、中にある桂木奈緒の手紙を強く握り締めた。不

思議と、元気が湧いてくるような気がした。

「よし、その息だ。気合も入ったことだし、そろそろ探索を再開しようか……ん？」

翔が立ち上がるうとした時だった。目の前の何かが翔の関心を引きいた。翔の視線がその一点に注がれる。

「どうした翔。何か見つけたか？」

翔は武の言葉には耳も貸さず、しゃがんだ体制のまま視線の注がれる場所へ歩み寄った。

少しして、翔から歓喜の声が上がる。

「武、あつたぞ！ 穴だ！ きつとここから入ったんだ」

翔が見つけたのは、フェンスと地面との間に穿たれたトンネルだった。穴の径は大人一

人が通れるか通れないかほどの大きさだったが、中学生が通り抜けるには十分だった。

「でかした翔！ なるほど……これなら何とか潜り抜けられそうだ。しかしフェンスの

下に行くとは、盲点だったよ」

「さっきの縄梯子といい、妙にとんちの効く奴だな、桂木奈緒って」

この頃には、二人の頭の中に桂木奈緒という人物像がおぼろげながら出来上がっていた。

当初は存在自体が怪しまれていた桂木奈緒だったが、今では二人

の中で、桂木奈緒という人間は間違いなく実在していた。

「この穴は恐らく、さっきのシャベルで掘ったんだろう。でも女の子一人で掘るのは大変だったろうな」

「いや、案外お前も一緒に掘ったのかもしれないぞ」
手紙から推測した事柄で、翔が茶化す。

「何度も言うが、俺がここへ来たのは今日が初めてだよ。こんな印象的な場所、一度来たら忘れるわけがない」

「冗談だよ冗談。でも考えれば考えるほどに不思議な話だよな。コンクリート小屋の実

在や小屋へ侵入した痕跡からして、手紙の内容が事実なのはほぼ間違いない。それなのに

お前には、その記憶が全くないなんて」

「おいおい、俺の記憶のほうがおかしいっていつのか」

「そんな事は言っていない。ただ不思議だなあと思っただけさ」

「……今はそんな事より、フェンスの向こう側へ行くことだろ。記憶がどうのこうのの

議論はひとまず置いて、そっちに集中しようぜ」

「そうだったな。脱線してすまない。目下の急務を片付けよう」

武の説得により、ひとまず議論は終了した。早速二人は、トンネルの潜り抜けへと取り

掛かる。まずは武がそれを試みることになった。

地面に寝そべりトンネルと格闘する武に、翔が声を掛ける。

「どうだ武、行けそうか？」

「少しきついけどなんとか……。こんなことなら、俺もジャージを着てくるんだった」

「小屋に忍び込むのが、こんなに過酷だとは思わなかったからな

あ。ほら、体押してやるから頑張れよ」

もがく事数分、翔の助力もあって、武はなんとかフェンスの向こう側へ抜け出ることができた。

「体が土で真っ黒だよ……親にどう言い訳しよう」

「はははっ。夏休みだしいいじゃないか。よし、次俺行くぞ」

武が苦心してフェンスの向こう側へたどり着くと、翔もそれに続いた。武同様、彼も潜

りぬけにてこずるかと思われたが、武よりも体が小柄な彼は、割りとすんなりフェンスの

向こう側へ抜け出ることができた。服についた土を手で払いながら翔が言う。

「ふう……。割と楽に抜けれたな。初めて体が小さくてよかったと思っただぜ」

「俺があれほど苦勞したというのに……。とにかく、後は小屋の中へ入るだけだ。案外

小屋の鍵、開いてたりして」

さほど期待はしていなかったが、小屋の入り口が施錠されていない可能性を考え、一応

確認だけはすることにした。小屋の入り口のへと向い、ドアノブを捻ってみる。しかし案

の定、ドアノブはガチャガチャと音を立てるだけで、うんともすんともいわなかった。

「残念。そう簡単にはいかないか」

「やっぱりさっきの窓から侵入するしかなさそうだな」

入り口からの侵入を諦めた二人は、先ほどフェンスの外側から確認した、小屋側面の窓がある場所へと移動した。

フェンスから伸びた縄梯子が、小屋上部の窓に吸い込まれるようにして消えている。地

面から突き出た棒は、やはり翔の予測したとおりシャベルだった。

「この窓から中へ入るのか？ 近くで見ると、結構な高さがあるぞ」

窓は地面から二メートルほどの高さに設けられていた。中学二年生の平均的な身長を持つ二人には、到底届かぬ高さだ。

「桂木奈緒が行けたんだ。俺たちに行けないはずが無いさ」

武はシャベルがしっかりと地面に固定されていることを確認すると、シャベルの柄に足を

を掛けた。その状態で小屋の壁に両手を着き、体を支える。呼吸を整え、シャベルに掛け

たほうの足を一気に踏ん張った。すると体が浮き上がり、たった一度の挑戦で柄の上に立つことができた。

「あ、上がった。思ったより簡単だったな」

「よし、そのまま中を覗いてみてくれ」

「わかった。ちょっとまってる」

柄の上に立つたまま、武は小屋の内部を覗き込んだ。しかし窓が一つだけしか設けられ

ていないこの小屋に太陽の光はほとんど届かず、まだ昼過ぎにもかかわらず薄暗かった。

そのせいで、内部がどうなっているのかを確認することはできなかった。

「暗くてよくわからないな。翔、俺のリュックから懐中電灯を取ってくれ」

翔は武のリュックから懐中電灯を取り出すと、武に手渡した。それを受け取った武は、スイッチを入れて再び窓を覗き込んだ。

「……うーん。部屋の中に物がなにもないぞ」

「まさかー。ちゃんと隅々まで見たのか？」

「本当だって。引越した後みたい、物が何一つ無いんだ」

武の言うことは本当だった。室内に小屋の使用用途を示す物は勿論、机や棚の類さえ、

何一つ置かれていなかった。

「それだとこの小屋の存在する理由が……あ、そうだ。階段は？手紙に書いてあった、

地下へ下る階段は？」

「階段は……ある」

がらんとした室内のちょうど真ん中に、室内と同じく無味乾燥な階段が存在していた。

恐らく桂木奈緒が手紙に記した、地下へと続く階段だろう。

「とりあえず室内に降りる。お前も後から来いよ」

武は窓枠に手を掛けると、シャベルの柄の上から飛び上がり、小屋の内側へ起用に体を

ねじ込んだ。そのまま足を窓枠まで引き上げ、向こう側へ降り立つ。武が小屋の内部へ侵

入する一部始終を見ていた翔は、それを真似て小屋の中へ侵入した。

「なんだ、この部屋。本当に何も無い。一体なにに使われてる小屋だろう」

「見当もつかないな。それにこの階段。こんな山奥の小屋に地下なんか掘って、何をしてるんだろうな」

用途の分からぬ殺風景なその小屋に、二人は戸惑った。ここを小屋と呼称していいのか、

それさえ迷うほどだった。まるでこの建物が、地下へ通ずる階段を隠すただけに建てら

れた、ただのコンクリートの壁のような。この小屋の存在理由の全

てが、地下にあるの
だろうか。

「この下に、桂木奈緒がいるのかな……」

「いや、さすがにもういないだろう。手紙を書いた日からもう何日も経ってるんだぜ？」

自分の家に帰ってるさ」

「そうだろうか。俺はまだ、この下に桂木奈緒がいる気がするんだ」

「気がするって……根拠はあるのか？」

「……わからない。わからないけど、そんな気がするんだ」

翔にはわからない何かを、武は感じていた。それは言葉では言い表すことのできない、第六感のようなものだった。

「……そうか。とにかく、下りて確かめてみるかなさそうだな。」

……心の準備はいいか？」

翔が武の目を見つめ、返事を請う。武は強張る右手をポケットに突っ込むと、まるで桂木奈緒から勇気を分けてもらうかのように、再び、手紙を強く握り締めた。その後、一度深呼吸してから答える。

「うん。行こう」

二人は手紙にも記されていない未知の領域へと踏み出した。室内に響く二つの靴音は、

やがて闇に吸い込まれて消えなくなった……。

——闇黒の空間を、二つの弱々しい光が下っていく……。

あれほど耳障りだった蝉の鳴き声もここへは届かない。音源といえば、階段を下る度虚

ろに響く、自分らの足音のみだった。もちろん二人の話し声も無い。階段を下り始めたき

り、口を閉ざしている。その沈黙は、二人の気が張り詰めていることを物語っていた。

階段は、幅一メートル、高さ二メートル程度の窮屈な作りだった。二人が横に並んで進

むのは困難だったので、話し合いの結果、翔が先頭を歩き、武が後ろに続く形となった。

階段の狭さから階段の作りのほうも乱雑なのではと思われたが、こちらの方は意外なこと

にしっかりとしていた。左右と天井の壁は剥き出しの土ではなく、きちんとコンクリート

で固められているし、ひびも入っていない。その作りは、言うなれば階段として使用する

上で最低限必要な幅、高さ、機能、強度だけを残した作りだった。

二人は常に緊張を維持したまま歩を進めた。湿度のせいかな、武の懐中電灯を握る手は妙

に汗ばみ、気を抜くと落としそうになった。武はその度にTシャツで手の平を拭い、神経を研ぎ澄ました。

階段を六メートルほど下った頃、どちらかの懐中電灯の光が階段の終点を捉えた。あと

数メートル下ったところで、階段は終わりを迎えている。

「見る、もうすぐ階段が終わる」

武の、地下へ降りてからの第一声だった。

「うん。しかしこの先何が待ち受けているかわからない。引き続き、注意して進もう」

翔が注意を喚起する。何しろ全てが未知の場所ゆえ、何処にどのような危険が潜んでいるかわからないのだ。桂木奈緒の手紙によれば、彼女はこの地下で、

“奇怪で恐ろしいも

の”を目撃したらしいではないか。その得体の知れぬ恐怖が二人の頭の中にあり、嫌でも警戒せざるを得なかった。

ややあつて、二人は階段を下り終えた。とりあえずは無事に階段を下り終えたことに安堵し、人心地付く。しかしそれもつかの間、直ぐに進行方向にまだ

通路が続いていることに気づいた。

「……今度はまっすぐか」

直線的な通路が一本、奥へと伸びていた。翔が電灯の明かりを前方にかざす。しかし光

は途中で闇にかき消され、突き当たりを捉えることはできなかった。どうやら通路はずい

分と奥まで続いているようだ。

「どうやら道は、この一本だけらしいな」

「うん。それにしても、先が見えない……最深部まで、あとどれくらいの距離があるんだろう」

翔はそう言い、額の汗を拭った。照らし出された影が、それに合わせて動く。

「意外ともうすぐかもよ。この地下を作った人が、桂木奈緒の見た“何か”を隠すためだけに地下を掘ったんだとしたら、通路を無駄に長くするなんて無意味なことはいらないと思う」

武は地下を開設した人間の立場に立つて考えた意見を述べた。割と説得力のある意見に、翔も納得したような顔をした。

「確かにそうだな……。そうとなれば、早速本丸目指して出発だ」
わずかながら氣力を回復した二人は、再び通路の奥へ向かって歩き出した。

先の発言などから、比較的落ち着きを保っているかのように見える武だが、実は先ほどから、恐怖や不安からくる緊張、窮屈さによる圧迫感などで、胃がきりきりと痛むのを感じていた。できることなら今すぐにでも地上に戻りたい。しかし、武はここで引き返す訳にはいかなかった。桂木奈緒が見た“何か”を、武は自身の目で確かめると心に決めたのだ。今ここで引き返しては、苦勞してここまで辿り着いた意味がなくなってしまう。言うなれば、手紙の謎を明かすという使命感がだけが、今の武を突き動かしていた。

「なあ、桂木奈緒が見た奇怪で恐ろしいものって、何だと思う？」
藪から棒に、翔が質問した。二人の間で何度も話題に上がった疑問だ。しかし手紙の文だけではさっぱりなので、直接見て確かめようという結論に至ったはずだ。

「さあ。奇怪で恐ろしいものってだけじゃあなんと……」

「なあ、地底人やUMAってことはないかな？」

普通なら口にするのを躊躇いそうな事も、翔は恬として発言する。実を言えば、同じよ

うな事を武も一度は考えた。しかしあまり現実的な話ではないので、早々に候補から除外していた。

「いや、無いだろう。仮にそうなら、とっくに桂木奈緒が公にしてるはずさ。それでも

って今頃は、新聞やニュースがその話題で持ちきりだ。でも実際はどうだ？ どこかの村で地底人が発見されましたなんて話、ちつとも聞かないだろ。つまりはそういうことさ」

武がもつともらしい事を言っつて、翔の意見を切り捨てる。しかし翔も、負けじとそれに反駁する。

「警察やマスコミに相手にされなかったただけかもよ。地底人を発見しましたなんて話、信じる人のほうが稀だ」

少々苦しい主張だったが、武は少し考え、翔の意見にも一理あると思った。武も、事情

を知らぬ状態で誰かに『地底人を発見した』などと言われたら、まず初めにその人間の精神状態を疑うかもしれないと考えたからだ。

「うーん……可能性は無きにしも非ず……」

「だろ？ もしこの話が本当なら、世紀の大発見だぜ。そうなれば、地底人の第一発見者ということで俺たちは一躍有名人だ。それでテレビに出ちゃったりなんかして、それから――」

そこから翔は、自分の予想する未来を嬉々として語り続けた。す

でに自分の想像が真実

だと信じきっているようだ。後ろを歩く武からは、その時の翔の表情を確認することはできなかったが、翔が満面の笑みを浮かべている様は容易に想像できた。

「夢があつて大いに結構。でも正確には、第一発見者は桂木奈緒だということを忘れるな」

夢中で語る翔に武が口を挟む。しかしその言葉はもはや、翔の耳に届いてはいないようだった。武は空いているほうの手で頭をかいた。けれども、翔のおかげで武の緊張は充分和らいでいた。こんな時でも楽天的に振舞える翔の性格に、武はひそかに心の中で感謝した。恐らく翔という存在がいなければ、武がここまで来る事はできなかっただろう。そんなことを思いながら通路を歩き始めて二十メートルほどの地点に来た時、電灯の明かりがついに通路の突き当たりを捉えた。

「おい見ろ、扉だ！」

武は立ち止まり、弾んだ声を出した。自分の世界に入り込んでいた翔も、武の一言で我に帰り、前方を見遣った。

「本当だ！ やつと終点か？ それともまだ続くんだろうか」

電灯の光が二つとも通路の奥へと注がれた。ぼんやりとだが、暗闇の奥に扉らしき物が

確認できる。二人はそこに目標を定め、再び歩き出した。

先ほどまで弛緩していた空気が、一転して緊張を帯びる。そのせいか、二人はまたもや

口を閉ざしていた。黒い影が足音だけを残して進んでいく。扉との

距離はみるみる縮まつ

いき、やがて二人は扉の前に到達した。

「さて……何の扉だ」

それは何の変哲も無い、金属製の片開き戸だった。表面は淡いベージュ色に塗装されて

いて、所々ペンキが剥げた部分は、錆が浮いていた。

「鍵がついていないから、このまま開けられそうだな。この先はどうなってるんだろ
う」

そう言つと、翔は扉に片方の耳を当て、扉の向こうに耳を澄ました。十数秒そうしてか

ら耳を扉から離すと、洪面を浮かべて首を左右に振る。

「ダメだ、何も聞こえない。さてどうする」

翔が武に意見を仰ぐ。武は少し考えるそぶりを見せた後、口を開いた。

「どうせ進むんだ。開けてみるよ」

武はここで立止つていても仕方がないと考え、扉を開けることを提案した。翔はその提

案に特には反対せず、頷いて了承の意を伝えた。

「わかった。ただ、開ける時は慎重にな」

武は翔の忠告に頷き、扉のノブに手を掛けた。ノブを捻り、静かに扉を前に押し出す。

金属の擦れ合う鈍い音と共に、扉がゆっくりと動き出した。すると、僅かに開いた隙間か

ら、内部の灯りがこちら側に漏れ出した。

「……！ 青い光だ」

なんと扉の向こうから、青色をした光が漏れ出した。それは舞台などで使われる青いスポットライトの様な光だった。その不気味な青白い光を見て、武は一旦ドアを押す手を止

めた。

「一体何だろう……翔、わかるか？」

二人の間に、一瞬にして警戒の色が広がる。武の問いかけに、翔は険しい表情を浮かべた。

「……わからないけど、中に何かあることだけは確かだ。どうする？ このまま進むか？」

翔が武に選択を迫る。それは言外に、ここで引き返すかどうかを問うていた。しかし武の答えは、心うちですでに決まっている。

「翔、お前はここで待っていてくれ。ここから先は、俺一人で行く」
武にここで引き下がるという選択肢はない。何があるかと前進あるのみだ。しかし友人

まで未知の危険に晒すことはできない。よって武は翔をここに残し、一人で扉の向こうに赴こうと考えた。

「おいおい、俺は引き返すなんて言った覚えは無いぜ。俺はただ、お前の覚悟が知りたかっただけさ」

翔はそう言い、不敵に笑って見せた。どうやら揺るがないものを持っているのは、武だけではないようだ。二人は顔を見合わせる。お互いのその目が、先に進む決意があることを雄弁と物語っていた。

「よし、開けるぞ」

武は再び扉に手を掛けた。未知への怯えなどはすでに消えていた。ここからは先は、ただ全てを受け入れるだけだ。そして今度は躊躇などせず、一気に扉を開け放った。

「……なんだここ……」

目の前に広がる光景に、武の口から思わずそんな言葉が漏れた。扉を開けた二人の目に飛び込んできたのは、真っ暗闇の中に、青い光が点々と浮かぶ、

ただっ広い空間だった。広さは恐らく、学校の体育館ほどは有るだろう。室内に照明の類

は無く、光源は先ほどの青い光のみだった。その何百はあろうかという青い光が、空間に

およそ一メートル間隔で点在している。そのせいか、室内はある種、幻想的な雰囲気包

まれていた。その青い光は、どうやら室内に並べられた何かから発せられているらしかった。

「村にこんな場所があったんだ……」

想定外の出来事に驚きを隠せないといった様子で、武が呟いた。

山奥の村にこのような

場所が存在することは、明らかに異質だった。それだけに、武はなにか、自分が禁忌をおかしてしまっているような感覚にとらわれた。

「村に住むどれだけの人が、この場所の存在を知っているんだろう」

「さあな……。しかし十四年間生きてきて、地下にこんな場所があるなんて話、一度も

聞いたことが無いぞ。クラスの奴等でさえ、たった一人しか小屋の存在を知らなかったく

らいだからな」

知らなくて当然という風に、翔は言った。それは、武も同じ事だ

った。そもそも武にしても翔にしても、桂木奈緒の手紙を読んで初めて、コンクリート小屋存在を知ったのだ。

恐らくこの手紙がなければ、この先二人がコンクリート小屋の存在を知ることとは無

かっただろう。しかし、現に実在するこの地下空間の事を、村の誰一人として語らぬのは、

単に村の誰もこの場所について認知していないだけなのか。あるいは……。

「とりあえず、ここが一体何なのか知る必要があるな。それにしても……こんなに広い

部屋、何に必要なのかな」

そう言つて、武が室内を眺める。改めて見ても、やはりその部屋は広がった。これほど

広い空間が地下に作られているというだけでも。事の異様さがわかる。

「見たところ、怪しいのはあの青い光を放ってる物体だな。よし、行ってみよう」

無数に存在する青い光の中で、部屋の入り口から最も近いものに翔は歩み寄った。しか

しその正体を確認するや否や、翔が悲鳴のような声を上げて後退った。

「ひっ……！ な、なんだこれ……！」

「どうした？ 何があつた？」

翔のただならぬ様子に、武はすぐさま翔の元に駆け寄った。武は駆け寄りながら、翔に

見た物の説明を要求した、しかし翔は口元を手で押さえながら、目の前の物体を指差すば

かりだった。これでは埒が明かず、武は自分で確認したほうが早いと考えた。武は翔の元

に到着すると、空唾を飲み込んだ。それからその青く光る物体に恐る恐る近づく……。

「えっ……これって……」

それは、液体で満たされた透明な容器の中に入っていた。細かな気泡がぶくぶくと湧き

上がる中、青い光を受けたそれが、容器内を漂っている。武はそれを、なにかのテレビ番

組や、理科の教科書の挿絵で見たことがあった。だからそれが何なのか知っている。――

それは、脳だった。厳密に言えば、何らかの生物の脳だった。

「……脳みそ……だよな……それって」

遠目から見守っていた翔が、武に問うた。先ほどより、幾分か落ち着きを取り戻していた。

「うん……。人間のかな？」

「そんなわけないだろ！ 猫とか犬のに決まってる」

「でもここに名前が……カネダキヨタカって、人間の名前じゃないか？」

武が、脳の入った容器の土台を指差しながら言う。見れば、土台には『金田清孝』と書

かれたプレートが取り付けられていた。武は金田清孝という人間に心当たりは無いが、恐

らく人間の名前であろう事は容易に推測できた。

「名前が書いてあるからって、人間の物とは限らないだろ。大体、それが本当とした

ら、一体いくつの人間の脳みそがここにあると思う？ 光の数から言って、数百はあるぞ。

そんな数の脳みそを、こんな山奥の村の地下なんか置いておくはずがない。動物のに決

まってる。あるいは、良くできた作り物か……」

「作り物だとしても、こんな山奥にこんな不気味ものを作るなんて、不自然だよ」

「じゃあなんだってんだよ！ ほかに考えようが無いだろ！」

武の応答に、思わず翔の声が荒くなる。しかし翔がやきもきするのも仕方が無かった。

誰だってこのような予想外の展開に遭遇すれば、自分で納得のいく説明をつけようとする。

しかしそれができないとなると、結果、苛々を募らせてしまう。やがて頭は、より現実的

で、より合理的な考えを求めだす。翔の、“脳は人間以外の動物のものである”という主張は、裏を返せば、そうあってほしいという願望なのだった。

「……すまん……なんか頭が混乱しちゃってさ……。すこし整理させてくれ……」

翔はそう言つて目を閉じると、頭の上に両手を置き、何事か思案し始めた。翔は、目の

前の現実を必死に受け入れようとしているのだ。

「うん。こっちこそごめん。翔はそこで休んでくれ」

武は、翔の気持ちを考えずに無神経な発言してしまったことを詫びた。そして翔をこの

場に来させてしまったことを、心の中で詫びた。しかし武にはやるべきことがあった。こ

こで怯んではいけないのだ。翔には悪いが、このままここですっとしているわけには

いかない。武は頭を抱える翔から視線を外すと、新しい情報を求めて動き出した。

武はまず、付近にある脳の入られた容器を検分してまわった。そのなかで、判明した事柄がいくつかある。

最初に、脳の入られた容器の配置についてだが、どうやら配置には、ある程度の法則

があるようだ。というのも、容器の土台には必ず人名の書かれたプレートが取り付けられているのだが、そこに着眼して容器を見て行くと、同じ姓が横並びに何個か連続する傾向があるのだ。どうやら脳は、同じ姓同士である程度かたまっているようだ。しかしそれが、

単に同じ姓を持つ者同士でまとめられたのか。あるいは、なにかしらの単位——例えば家

族だったり親族だったり——でまとめられているのか、という事まではわかりかねた。も

しプレートの中に武の知り合いの名が含まれていれば、そこから並びについて何かしらの

手がかりを得ることができたのかも知れぬが、残念ながら知らぬ名ばかりだった為、この

時点でわかることは、同じ姓がまとまっているということだけにとどまった。

そして次に、脳そのものについてわかった事だ。まず、容器内の脳が本物であるかとい

う疑問だが、武が見る限り、すべての脳は紛れも無い本物だった。

しかし、それが精巧に

作られた偽物という可能性も無きにしも非ず。またそれが、人間の脳かどうか、という話

になると、いかんせん武には判断できかねた。なにぶん、人間と他の生物の脳を見比べる

機会など武にあったはずもなく、わからないのも当然といえる。

脳は一辺が三十センチほどの四角い透明な容器に入れられおり、その容器内は何らかの

液体で満たされていた。容器全体は青の光を受けており、液体の色を確認することはでき

なかった。青の光の正体は不明。液体についても同じだ。また、脳には細い針のような物

が数本刺されており、その針のもう一方の端からは、非常に細い糸のようなものが伸びて

いた。糸は容器下部の小さな穴から土台内部へと消え、土台の下部からは、径が三センチ

ほどのケーブルが出ていた。ケーブルの行方を目で追ってみると、ケーブルは床を這うよ

うにして部屋の中央に向かっていているらしかった。

以上が、今の時点で武が所有する情報の全てだった。しかしこれらの情報を踏まえて考えてみても、依然として、この施設が何の目的で存在しているのか判然としなかった。ま

だ調べていない場所もあるが、その場所を調査したところで、武にこの施設の概要を把握

する自信はなかった。この部屋は明らかに常軌を逸している。なんと言ったって、何百と

いう正体不明の脳髓が、真っ暗な部屋に点々と浮かぶ青い光の中を、ゆらゆらと漂ってい

るのだから。そう考えると、武は一瞬、自分がまるで悪魔の実験室か何かをみているよう

錯覚にとらわれた。恐らく桂木奈緒の見た奇怪で恐ろしいものとは、

この脳髓の群れのこ
とであろう。

しかし手紙によれば、後に桂木奈緒は自らの推論を導き出した。その推論がどういふものなのか、本人無き今、確認するすべは無い。しかしその考えが真実にしろそうでないにしろ、桂木奈緒は苦悩を重ねた末に、その結論へとたどり着いた。理不尽な恐怖から逃げ出さず、二度もこの場所へ訪れた。その真実を求める強い気持ちが、今の武にはあるのか。

当時の桂木奈緒の心中を察するに、誰にもこの場所のことを相談できず、さぞ心細かったことだろう。しかし今の武は、友人と共にこの場所へ訪れている。その分いくらか気持ちに余裕があるはずなのだ。そう思うと、少しずつ武に気力が湧いてきた。諦めるのはまだ早いと思った。武は真実を求め、再び行動を開始した。

まだ調べていない場所といえば、土台から出たケーブルの行き先ぐらいだった。武はケーブルを辿り、部屋を中心部へと向かった。

部屋の中心部につくと、そこには円柱形の巨大なタワーのような物が置かれていた。タワーは全部で四つあり、一つ一つが見上げるほどの高さがある。目測するに、直径は約二メートル、高さは優に三メートル以上はあるだろう。近づいてみると、タワーの表面は金属のような鈍い銀色の素材で覆われていた。表面に凹凸などは無く、つるりとしている。

武は右手を伸ばし、タワーの表面に手で触れてみた、するとその表

面は驚くほど冷たかった。例えるなら、冷蔵庫から取り出した直後の缶ジュース並みの冷たさだった。何らかの理由で、内部から冷却しているのだろうか。下部に目をやると、脳の土台から伸びたケーブルが何本かにまとめられ、タワーへと接続されていた。おそらく何百本という脳からのケーブルが、このたった四本のタワーに集約しているのだ。察するにこのタワーは、文字通りこの部屋を中心に担っているのだろう。

次に武は、外周沿いにタワーの表面を検分して行った。すると間もなくして、二十インチほどの大きさの、パネルディスプレイらしきものが現れた。覗き込むと、画面にはなにやら英語や数字が事細か表示されている。脳から送られた何らかのデータが、ここに表示されているのだろうか。しかしそれが何を表しているのかを読み取ることはできなかった。武はパネルで何らかの操作ができないかと思い、画面に触れてみた。すると妙な効果音と共に、画面上にパswードの要求画面が現れた。もちろん武がパスワードなど知るはずも無く、何度か適当に思いついた英数字を打ち込んでみたものの、当然のごとく全て弾かれてしまった。

武はディスプレイから視線をはずすと、新しい情報を踏まえた上で、再び思考した。このタワーである数百の脳を管理しているらしいことはわかった。しかし、脳を管理することで、一体何をしようとしているのかわからない。実験的な何か

なのか？ あるいは宗

教的な儀式か？ いくら考えたところで結論は出ない。なにか、真実を知る為の決定打となる情報が必要なのだ……。

そこで不意に、置いてきた翔の様子が気になった。翔に何も告げずにここまで来てしま

ったが、急に武の姿が見えなくなったので、不安に思っているのではないか。武は考える

ことを一時中断し、様子を見るために翔の元へ戻ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7047w/>

夏の遊戯

2011年11月2日17時20分発行